

March 2025
会員連絡 No.33

The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism

日本心血管内分泌代謝学会

- ご挨拶：理事長／役員退任
- ご案内：第29回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
- ご報告：第28回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
受賞者紹介 高峰譲吉賞／高峰譲吉研究奨励賞／中尾一和賞／
若手研究奨励賞／若手研究助成
研究室紹介／活動報告
第28回評議員会・総会
- 各種名簿

日本心血管内分泌代謝学会
事務局

〒600-8441 京都市下京区新町通四条下る四条町343番地1
タカクラビル6階 一般社団法人日本内分泌学会 内
TEL：075-354-3562 FAX：075-354-3561 E-mail：cvem@endo-society.or.jp



目次

理事長ご挨拶	2
第 29 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会開催のご挨拶	3
役員退任のご挨拶	4
第 28 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 開催報告	12
第 28 回日本心血管内分泌代謝学会受賞者プロフィール	
・ 第 28 回高峰譲吉賞	14
・ 第 28 回高峰譲吉研究奨励賞	16
・ 第 5 回中尾一和賞	20
・ 第 28 回若手研究奨励賞	22
・ 2024 年度若手研究助成	27
研究室紹介	29
活動報告	34
名簿	
理事・監事・幹事	36
名誉会員	37
功労評議員	37
評議員	37
2024 年度新入会会員	38
第 28 回日本心血管内分泌代謝学会評議員会・総会議事録	39

CVEM の歩みと展望

東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

吉村道博



略歴

昭和 61 年 (1986 年)	宮崎医科大学卒業
昭和 61 年 (1986 年)	熊本大学医学部附属病院循環器内科研修医
昭和 62 年 (1987 年)	熊本市市民病院内科研修医
昭和 62 年 (1987 年)	熊本労災病院内科研修医
昭和 63 年 (1988 年)	熊本中央病院循環器内科レジデント
平成 5 年 (1993 年)	熊本大学大学院医学研究科修了
平成 5 年 (1993 年)	熊本大学医学部循環器内科医員
平成 6 年 (1994 年)	熊本大学医学部循環器内科助手
平成 12 年 (2000 年)	熊本大学医学部循環器内科講師
平成 13 年 (2001 年)	熊本大学医学部循環器内科助教授
平成 19 年 (2007 年)	東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科講座 担当教授

日本心血管内分泌代謝学会 (CVEM) の第9代理事長を務めております吉村道博です。副理事長である九州大学の小川佳宏教授と共に、学会のさらなる発展に向けて引き続き尽力してまいります。まず、2024年12月に福岡で開催された学術総会は、小川会長の卓越した指導のもと、大成功を収めました。この場を借りて心よりお祝い申し上げますとともに、ご参加いただいた皆様に深く感謝申し上げます。私は「ホルモンが紡ぐ臓器連関」を本学会のテーマに掲げていますが、昨年は循環器、内分泌・代謝各疾患における分野横断的な議論がさらに進展したと感じております。会員の皆様の研究活動が着実に進展していることを大変嬉しく思います。近年、ARNI、SGLT2阻害薬、GLP-1受容体作動薬など、内分泌・代謝機構をターゲットとした治療薬が注目されています。これらの臨床応用が進む中で新たな知見が次々と蓄積されており、この進歩を皆様と共有することも、さらなる学術的貢献につながると思います。また、学会の持続的な発展には、若手研究者の積極的な参加が不可欠です。今年は特に若手会員の増加を目指し、学会活動や研究成果を広く発信する施策を強化いたします。インターネットや各種媒体を活用し、次世代の研究者や臨床医を育成する基盤を構築してまいります。私自身、心不全を専門としながら、腎臓病、糖尿病、肥満といった疾患との統合的アプローチの必要性を強く感じています。さらに、認知機能障害や加齢に伴う病態についても、内分泌代謝学の視点から包括的に議論する重要性を認識しています。CVEMの特徴である領域を越えた自由で活発な議論を重視し、さらなる飛躍を遂げることを目指します。この目標を達成するためには、会員の皆様のご支援とご協力が欠かせません。今後とも、皆様のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

第29回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 (CVEM2025)

開催のご挨拶

会長 田村 功 一

(横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学 / 附属市民総合医療センター)

副会長 石上 友 章

(横浜市立大学附属病院 循環器内科)

2025年9月27日(土)・28日(日)の2日間にわたってパシフィコ横浜ノースにて第29回日本心血管内分泌代謝学会学術総会(CVEM2025)を開催させていただきます。本学会が横浜で開催されるのは、当教室前任の主任教授の梅村 敏横浜市立大学名誉教授が会長として2014年11月21日(金)・22日(土)に横浜市開港記念会館にて第18回日本心血管内分泌代謝学会学術総会を開催してから11年振りとなります。

2028年に創立100周年を迎える横浜市立大学の掲げる「伝統と革新の、その先へ」とも連動した「心腎代謝連関の研究と臨床：伝統と革新の、その先へ」を今回CVEM2025のテーマとし、CVEMとそれを取り巻く幅広い最先端の基礎・トランスレーショナル・臨床研究を取り上げます。高齢化の進展と相まって近年著しい増加傾向にある高血圧、糖尿病・脂質異常症・高尿酸血症などの代謝疾患、脳心血管病、腎臓病は互いに影響し合って共通の病態基盤を形成しており、一体的に“心腎代謝連関病”として捉え、各病態に対する個別的对応とともに包括的対応による病態連関制御が重要であると考えられます。この増大しつつある“心腎代謝連関病”は、“フレイル・転倒・認知症”とも関連しています。そこで、CVEM2025は、これらを克服して健康長寿のさらなる向上を図るため、様々な臓器による心血管内分泌代謝の恒常性維持機構と破綻病態を見渡してともに検討し、CVEMの将来像も含めて議論する領域横断的な総会にしたいと思います。

このように、CVEM2025では「高齢化社会の心腎代謝連関病に対する未病からの基礎研究—ICT/IoT/EHR/PHR/RWD/AI利活用—診療連携体制構築へのシームレスな研究展開を軸に健康長寿向上を図る！」ことをめざします。そのため、CVEM2025では“心腎代謝連関病”と“フレイル・転倒・認知症”の両者の制御を見据え、プログラムは、心血管内分泌代謝領域及び医工連携領域を包含した特別企画・講演、シンポジウム、ワークショップ、口演・ポスターセッション、YIA、協賛セミナーを設ける予定です。特に次世代を担う若手には、奮って演題を応募していただければ幸いです。夜景のイルミネーションもまばゆい横浜みなとみらい地区のパシフィコ横浜ノースで皆様にお会いできるのを楽しみにしております。多くの会員の皆様の御参加と演題登録をお待ちしています。皆様のご指導をいただきたく、何卒宜しくお願い申し上げます。



第29回 The 29th Scientific Session of the Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism

日本心血管内分泌代謝学会 学術総会

CVEM2025

心腎代謝連関の研究と
臨床：伝統と革新の、その先へ

● 会期 2025 9.27(土) - 28(日)

● 会場 パシフィコ横浜ノース

● 会長 田村 功一
横浜市立大学 医学部 循環器・腎臓 高血圧内科学 主任教授
横浜市立大学附属市民総合医療センター 院長

● 副会長 石上 友章
横浜市立大学附属病院 循環器内科 教授

● 幹事 小豆島 健護
横浜市立大学 医学部 循環器・腎臓 高血圧内科学 助教

<https://www.m-toyou.com/cvem2025/>

栗原 裕基 先生（東京大学・熊本大学）



略歴

1983年	東京大学医学部医学科卒業
1990年	日本学術振興会特別研究員
1991年	東京大学医学部第三内科助手
1992-93年	スタンフォード大学循環器内科博士研究員
2000年	熊本大学発生医学研究センター細胞識別分野教授
2002年	東京大学大学院医学系研究科代謝生理化学分野教授
2024年	東京大学アイソトープ総合センター特任教授 熊本大学国際先端医学研究機構卓越教授 東京大学名誉教授

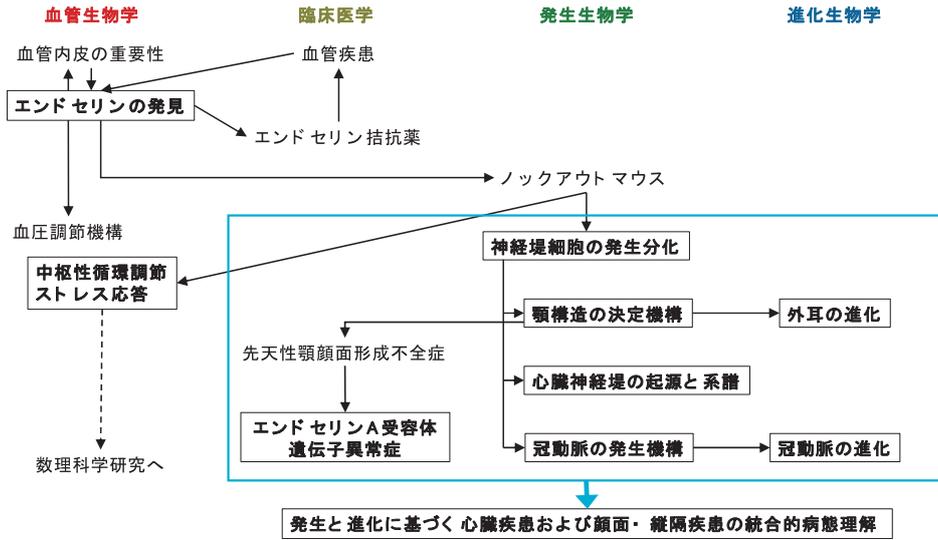
2024年12月に開催された第28回日本心血管内分泌代謝学会（CVEM）学術総会をもちまして、本学会の理事を退任いたしました。1997年の第1回学術総会より参加させていただき、大変多くのことを学ばせていただきました。2000年に臨床から基礎医学に転身し、研究テーマも発生学に大きくシフトしてからは学会に十分な貢献もできず心苦しく思っておりましたが、こうして定年まで理事として参画させていただきましたことに心より感謝申し上げます。

第1回の開催当時、“cardiovascular endocrinology”という響きは大変新鮮であり、metabolismを加えたこの学会には、当初からまさに学際的な雰囲気があったことを思い出します。循環ペプチドをはじめとする我が国の研究は世界をリードしており、CVEMは基礎、臨床問わず異なる分野から高名な先生方から我々のような若手が一堂に会する、いわば異種格闘技の道場のような場だったように思います。それから四半世紀を過ぎた今、内分泌や代謝をベースにした心疾患の病態生理の理解や治療が当たり前に行われるようになりましたが、昨年12月の学会でフロアから中尾一和先生が、当時から本学会がその重要性を予見していたことを熱く語っておられ、CVEM設立に関与されていた当時の先生方の炯眼に、敬意を新たにしました次第です。

本学会のもう一つの良さは、余り大きすぎない規模感にもあったように思います。そのため、本学会をきっかけに多くの方々と領域や大学の垣根を越えて親しくお付き合いさせていただくようになり、それがさまざまな面で貴重な糧になりました。

昨今、中国をはじめアジア諸国の科学技術は著しい勢いで発展しており、我が国はその後塵を拝する状況に追い込まれていることが危惧されています。近隣諸国の国際研究におけるプレゼンスとそれを支える若い世代の研究者の活気を思うと、我が国の現状に対する焦燥とともに自戒の思いを禁じ得ません。そうした中でも、学際交流を通して日本から独自性の高い研究成果を発信してきた本学会には、この状況を打破していくポテンシャルがあると信じております。私自身も昨年4月から所属が変わりましたが、体力と資金が続く限り研究を続けるつもりでおります。今後も少しでも本学会に貢献していけるよう、微力ながら努力してまいりたいと思います。

これまでの研究の歩みと今後の展望



児島 将康 先生（ジーラント株式会社代表取締役、久留米大学名誉教授）



略歴

学歴：

昭和 59 年 3 月（1984 年）宮崎医科大学医学部卒業

昭和 63 年 3 月（1988 年）宮崎医科大学大学院博士課程修了（医学博士）

研究歴：

平成 7 年 4 月～平成 13 年 3 月 国立循環器病センター研究所生化学
部室長

平成 13 年 4 月～令和 6 年 3 月 久留米大学分子生命科学研究所遺伝
情報研究部門教授

令和 6 年 4 月～ 久留米大学名誉教授、久留米大学客員教授

令和 6 年 4 月～ ジーラント株式会社代表取締役

皆さま

長年にわたりご指導、ご厚情を賜りましたこと、本学会の理事・役員・会員諸氏に心より深く御礼申し上げます。私は基礎医学の研究者として、特にペプチドホルモンの研究を専門としてまいりました。本学会において学びの場をいただき、多くの貴重な経験を積むことができましたことに、改めて感謝の意を表します。

私自身の研究に関しては、発見した「グレリン」というペプチドホルモンに関する研究を通じて、その役割や受容体の構造を解明するまでに多くの時間と努力を要しましたが、最終的にその全貌を明らかにできたことは、研究者として大きな喜びであり、本学会の場においてその成果を共有できたことは光栄でした。また、2016年には第20回高峰譲吉賞を授与していただき、さらに2021年には第25回学術総会（CVMW 2021）の開催に携わることができました。しかしながら、第25回学術総会は新型コロナ禍の影響でやむなくオンライン開催となり、直接会場で多くの方々とは交流できなかったことは非常に残念でした。

学会活動を通じて、「内分泌」や「代謝」、「心血管」に関する最先端の知見を学ぶとともに、「ナトリウム利尿ペプチド」や「グレリン」などのペプチドホルモンが医学に与える影響の大きさを痛感してきました。さらに、臨床応用を目指した多くの研究発表からも多くの示唆を得ました。例えば、ペプチドホルモンを基盤とする新規治療法の可能性や、基礎研究と臨床研究の橋渡しに関する議論には、研究者として非常に刺激を受けました。これらの学びは、今後の研究活動の方向性を考える上で大きな財産となりました。

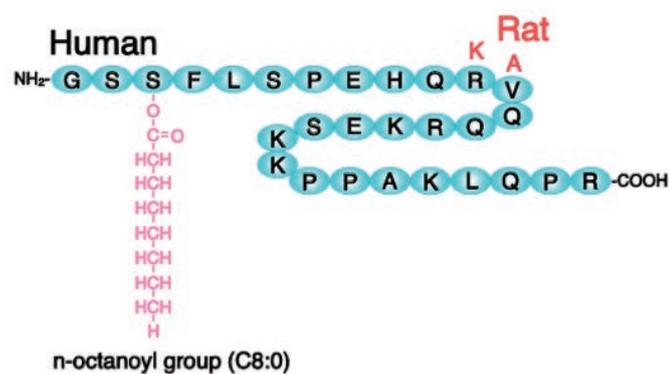
また、近年はAIを活用した研究手法が急速に進展しており、データ解析やシミュレーションの精度が飛躍的に向上しています。これにより、従来の方法では解明が難しかった課題に対する新しいアプローチが可能となり、基礎研究から臨床応用までの道のりが劇的に短縮されています。このような技術革新が、未来の医学の発展に大きな貢献を果たすことを確信しています。

本学会がこれまでと同様に、最先端の知見と技術を取り入れながら、多様な研究者が自由に参入できる場であり続けることを切に願っております。これからの研究が、医学のみならず広く社会全体に貢献することを期待しております。

最後になりますが、本学会の発展と、会員の皆さまのご活躍を心よりお祈り申し上げます。これまでのご厚情に改めて感謝申し上げますとともに、今後とも引き続きご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ありがとうございました。

グレリンの構造



グレリンの構造の模式図：グレリンの発見がなければ、私はこの学会との係わりもなかっただろうし、研究者として生き残ってこられたのか、わからない。

向山 政志 先生（社会保険大牟田天領病院）



略歴

- | | |
|-------|-----------------------------|
| 1983年 | 京都大学医学部医学科 卒業 |
| 1990年 | 京都大学大学院医学研究科博士課程（第二内科） 修了 |
| 1991年 | Stanford 大学医学部心臓血管研究所 研究員 |
| 2002年 | 京都大学大学院医学研究科内分泌代謝内科 講師 |
| 2006年 | 同 助教授（准教授） |
| 2013年 | 京都大学大学院医学研究科腎臓内科学 准教授 |
| 2014年 | 熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学 教授 |
| 2024年 | 福岡県社会保険医療協会 社会保険大牟田天領病院 病院長 |

2024年の第28回日本心血管内分泌代謝（CVEM）学会をもちまして、理事を退任しました向山です。私は第1回の学術総会から参加し、CVEM学会設立から今日までその歴史をつぶさに見てきましたので、感慨も一入であるとともに、まさにこの学会に育てていただいたと思っています。長年にわたりご指導、ご交誼いただきましたこと、本学会の理事、役員、会員の先生方に厚く御礼申し上げます。

私が京都大学第二内科大学院で研究を始めた1980年代半ばはまさにCVEMの黎明期であり、Na利尿ペプチド、NO、エンドセリンと相次ぐ血管作動性物質の発見に胸を躍らせていました。私はまず、中尾研究室でANPモノクローナル抗体の作製と測定系開発に始まり、さらにBNP発見後はその測定系を開発、そして心不全における意義解明を行いました。この際、熊本大学循環器内科泰江教授、吉村先生との共同研究で検体供与など大変お世話になり、これがのちの私の歩みに大きく影響したと思います。留学中はVictor Dzau博士のもと、angiotensin II AT2受容体のクローニングを行いました。このとき、樂木宏実先生、森下竜一先生、栗原裕基先生らと出会い、のちに本学会でさらに交流を深めたのも大きな財産となりました。

帰国の際、中尾教授との話し合いで腎臓を専門にすることを決め、その後多くの先生方に支えられながら次第に腎臓内科医として認められるようになりました。研究は腎臓病学と内分泌学との接点を中心に、Na利尿ペプチド系、レニン・アンジオテンシン系、増殖因子やサイトカインなど液性因子の腎臓病における役割を軸に進め、2000年代以降それなりに成果を出すことができました（図）。折しも心腎連関や慢性腎臓病の概念が生まれ、まさに臓器連関や代謝連関からみた腎臓病学が勢いづいてきた頃で、それが結果的に現在のARNIやSGLT2阻害薬、GLP-1受容体作動薬、MR拮抗薬の開発につながったとうれしく思っています。

2014年から熊本大学腎臓内科学に移り、同じ路線で仕事を続けることができたのも、私の基礎にCVEMがあったからだと思います。2022年にはコロナ禍のなか、伊藤裕先生が会長を務められたISHのサテライトとして京都で国際CVEMを主催させていただきました。盛会に終わり、会員の皆様には改めて御礼申し上げます。

新専門医制度スタート以降、専門医を持たない本学会の会員数が若手中心に減少傾向にあります。しかし、本学会は基礎医学・臨床医学が融合し、極めて高い学術レベルを維持していると

もに、専門分野にとらわれない自由な発想・研究方法を学ぶのに大変よい機会となっています。今後、微力ではありますが、私の経験談を話しながら、CVEMのよさを若手医師・研究者に伝えていけたらと思います。永い間、本当にどうも有難うございました。

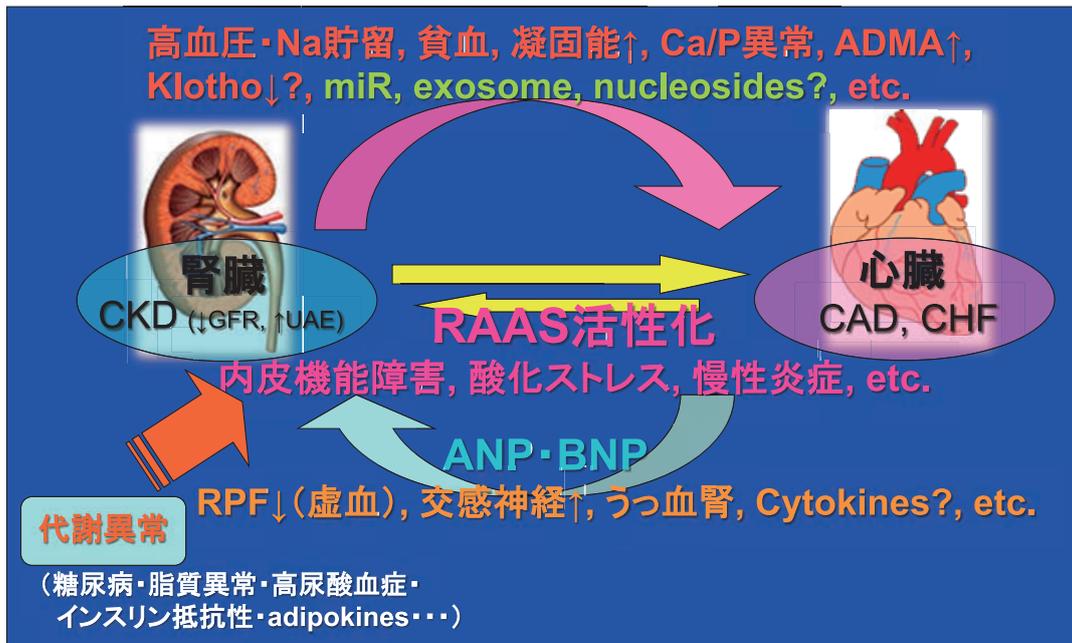


図. CKDと心腎代謝連関

樂木 宏実 先生（大阪労災病院）



略歴

1984年	大阪大学医学部	卒業
1989年	米国ハーバード大学心臓血管内科	研究員
1990年	米国スタンフォード大学	研究員（～1991年）
2007年	大阪大学大学院医学系研究科	老年・腎臓内科学 教授
2015年	同	老年・総合内科学 教授（内科学講座再編による）
2023年	大阪労災病院	院長
2024年	同	総長 現在に至る

日本心血管内分泌代謝学会には、正式な学会になる前の研究会の段階から参加させていただき大変多くのことを学ばせて頂きました。大学に研究生として戻った最初の研究テーマが ANP とアンジオテンシンⅡの腎臓での相互作用に関する健常人への hANP 点滴投与による研究でした。教室の伝統であるレニン-アンジオテンシン系にも関わり、留学前はエンドセリン発見の年代に重なり、循環調節に影響を及ぼす多くの役者と出会うことができたことは幸運でした。米国の Dzau 博士のもとに留学した時は、血管内膜障害後の内膜増殖とレニン-アンジオテンシン系の関係を研究しましたが、成果が出ない時代にサバティカルで研究室に滞在された中尾一和先生に励ましていただき、お知り合いになれたことも幸運でした。中尾先生から、先生の研究の範囲内で頑張っていれば色々サポートするといったお言葉を頂き感激しつつも、先生方のご研究の域に遠く及ばずに思い悩んだ日々も懐かしいです。そのような時期に、多くの同世代の人たちが集まって討論できる場として CVEM が発足したことは自分の研究の立ち位置を把握するのに大変役に立ちました。第4回学術総会（荻原俊男会長）の事務局長、第21回学術総会会長を担当させて頂いた他、2018年には高峰譲吉賞の栄にも浴することができました。図は、その時の受賞講演のまとめにその後の発展を付け加えたものです。

さて、研究テーマは時代とともに変わります。研究手法の変化に伴い、個人で遂行できる研究の範囲が小さくなり、大きな研究組織の一員としてしか成果を出しにくくなっている状況ではありますが、自分の研究の先にあるものを見据えながら探求する基本は変わっていません。臨床出身の研究者が減っている状況においても、CVEM 発足当時と同じように同世代が集いお互いに切磋琢磨できる場であり続けてくれることを願っております。また、学会の顔となられる先生方のご活躍、お声がけは、私の若い時を振り返っても若手にとって貴重です。功労評議員の立場を与えていただきましたので、臨床出身の立場で少しでも学会に恩返しができればと思っています。

心血管内分泌代謝学と高血圧学から 老年医学研究への発展を健康長寿・幸福長寿に生かす

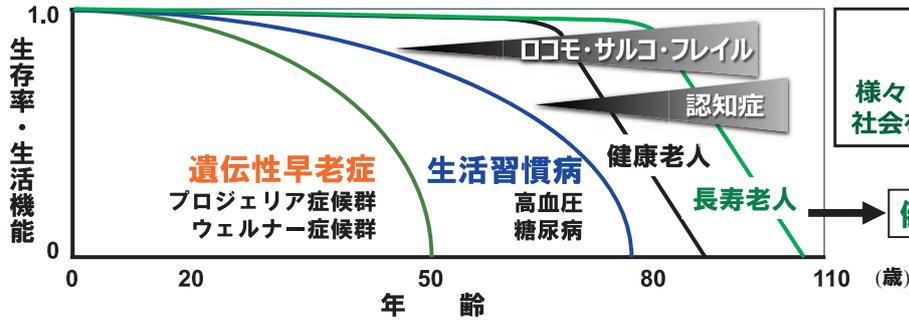
心血管内分泌代謝学や高血圧学からのアプローチ

- 老化促進に影響する生活習慣病研究
- ANP、エンドセリン、アンジオテンシンIIの病態生理的意義を循環系や動脈硬化の観点で研究
- 高齢期の生活習慣病管理の最適化



老年医学研究への展開

- ACE2、Ang1-7の新しい役割と老化への関与の可能性
- AT1とパターン認識受容体の重合による老化関連疾患進展の可能性
- 生活習慣病ワクチンによる先制医療
- 老化制御液性因子の探索と介入研究
- 高齢労働者のフレイルと転倒災害対策の研究



幸福長寿
様々な状況の人々が超高齢社会を幸福と感じる共生社会

↑

健康寿命の延伸

CVEM and Beyond: CVEM2024

会 長 小 川 佳 宏
(九州大学)

事務局長 馬 越 洋 宜
(九州大学)

2024年12月7日(土)に第28回日本心血管内分泌代謝学会(CVEM)学術総会を九州大学医学部百年講堂にて開催させていただきました。創設30年の本学会の学術総会の福岡開催は初めての事です。過去数年間にコロナ禍を経験し、本学会の学術総会は2021年度まで、関連学会と心血管代謝週間(CVMW)として共同開催されてきました。2022年度は国際高血圧学会(ISH2022 Kyoto)の前日に「International Symposium on Cardiovascular Endocrinology and Metabolism」との合同開催(向山政志会長)として、2023年度はWEBによる単独開催(下澤達雄会長)として、将来の方向性を模索してきました。2024年度の学術総会では原点に立ち返って、CVEM単独で現地の対面開催としました。当日は103名の参加者を得て何とか無事に終わることができました。福岡の現地に御参加いただいた皆様、厳しい情勢の中で御支援をいただいた各方面の皆様にご心より御礼を申し上げます。

今年度の学術総会ではCVEMの新しい展開を求めて、「CVEM and Beyond」としました。特別講演では、西川博嘉教授(国立がんセンター・名古屋大学・京都大学)より「がん免疫療法の臨床応用がもたらした新たな腫瘍生物学～免疫ゲノム解析により見えてきたもの～」と題した格調高い御講演をいただきました。腫瘍微小環境の免疫制御に関する最先端の研究成果は、様々な臓器・疾患にも応用できるものであり、多くの聴講者が熱心に聴き入っていました。特別講演以外にも、5つのシンポジウム、3つのランチョンセミナー、1つのスポンサードシンポジウムとともに、高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞、中尾一和賞、YIA 審査講演、一般演題、ポスター発表にも多くの参加者に熱心に御参加いただきました。夕方の「シンポジウム5」は、日本内分泌学会創設100周年特別企画「CVEMと最新テクノロジー」として、CVEMの非会員の3人の演者より、領域横断的な話題として、フレキシブルエレクトロニクス、最先端のイメージング、ビッグデータサイエンスに関する最先端の研究成果を御講演いただき、新しい研究に向けて想像力をかき立てられたものと思います。今年度は単独開催でもあり、参加者の便宜を図るべく丸一日に多くを詰め込んだ少し欲張ったプログラムになりましたが、従来のCVEMのコアの研究領域に加えて、周辺領域あるいは最先端の解析手法に関する話題も積極的に取り入れて、「Beyond」の部分についても議論する機会を提供できたものと思います。

過去10年間には様々なことがありましたが、次の10年間は一層大きな時代のうねり・変化を経験することになるでしょう。先の見えない時代にCVEMも時代に即した変化が求められるように思います。本年度の学術総会が新しい時代を乗り越えていく何らかの手掛かりになれば幸いです。

2025年にはパシフィコ横浜で田村功一会長(横浜市立大学)の学術総会にて皆様にお目にかかることを楽しみにしております。



Fig. 1 高峰譲吉賞 田村功一先生（横浜市立大学）と吉村道博理事長



Fig. 2 高峰譲吉研究奨励賞 中山幸輝先生（東京大学）と吉村道博理事長



Fig. 3 高峰譲吉研究奨励賞 三島英換先生（ヘルムホルツ協会・ツェントゥルム・東北大学）の受賞講演（オンライン）



Fig. 4 中尾一和賞 野村征太郎先生（東京大学）と中尾一和先生・吉村道博理事長



Fig. 5 YIG (Young Investigator Grant)



Fig. 6 YIA (Young Investigator Award)

第28回日本心血管内分泌代謝学会研究賞 受賞者プロフィール

第28回日本心血管内分泌代謝学会研究賞を受賞されました先生方のプロフィールを掲載いたします。

----- 第28回高峰譲吉賞受賞者 -----

田村 功一 先生 (横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学主任教授
横浜市立大学附属市民総合医療センター病院長)

受賞演題

「心腎代謝連関病の統合的理解と包括的治療戦略探求」



略歴

昭和 63 年 (1988 年)	横浜市立大学医学部医学科卒業
平成 3 年 (1991 年)	筑波大学大学院農学研究科特別研究学生
平成 6 年 (1994 年)	日本学術振興会特別研究員 (PD)
平成 10 年 (1998 年)	Harvard Medical School 日本学術振興会海外特別研究員
平成 12 年 (2000 年)	藤沢市民病院腎臓科医長
平成 28 年 (2016 年)	横浜市立大学医学部循環器・腎臓内科学主任教授
平成 29 年 (2017 年)	横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学主任教授
令和 5 年 (2023 年)	横浜国立大学総合学術高等研究院 (IMS) 客員教授 (兼務)
令和 6 年 (2024 年)	横浜市立大学附属市民総合医療センター病院長 (兼務)

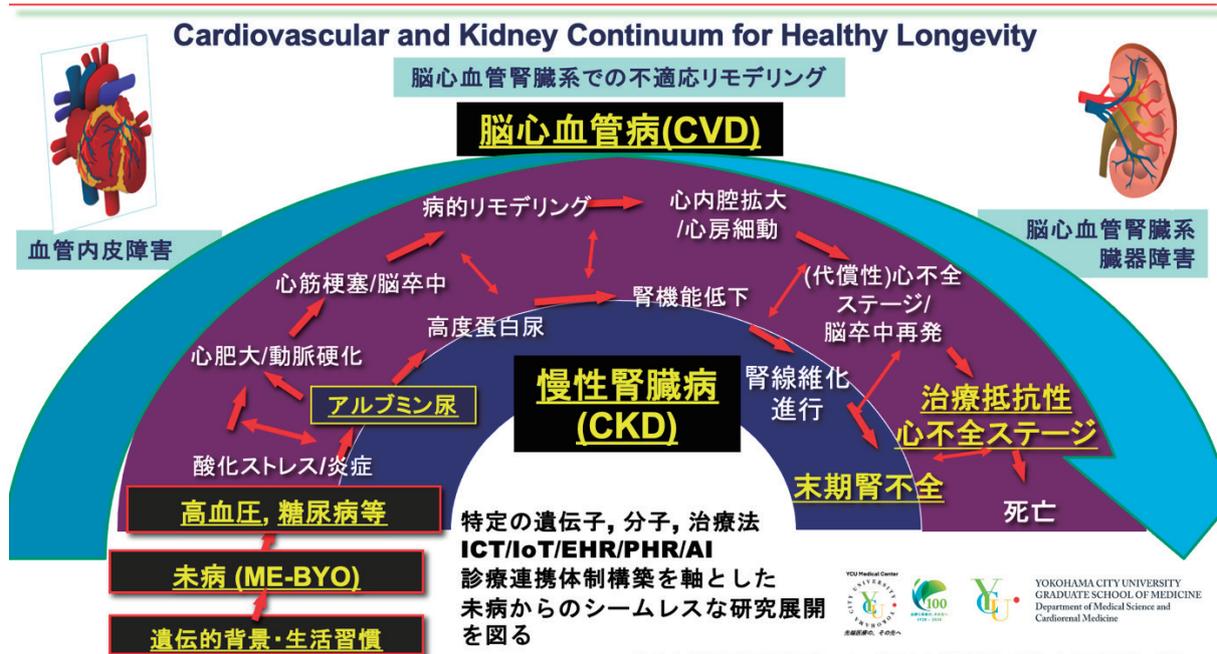
この度は第28回高峰譲吉賞を受賞させていただきまして誠にありがとうございます。本学会の理念を体現された高峰譲吉先生を冠した本賞の受賞は身に余る光栄でして心から感謝申し上げます。歴代の受賞者は心血管内分泌代謝領域に大きな足跡を残された偉大な研究者の先生方ばかりであり、まさに身の引き締まる思いです。本学会理事長の吉村道博先生（東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科教授）、選考委員の先生方、会員の皆様にも重ね重ね心より御礼申し上げます。

2024年6月に横浜市立大学附属市民総合医療センターの病院長を拝命して病院長としての業務ウエートがかなり大きくなっていますが、主任教授としてのアカデミア関連活動ももちろん継続しています。高齢化の進展と相まって近年増加傾向にある高血圧、糖尿病・脂質異常症・高尿酸血症などの代謝疾患、脳心血管病、腎臓病は互いに影響し合って共通の病態基盤を形成しており、一体的に“心腎代謝連関病”として捉え、各病態に対する個別的対応とともに包括的対応による病態連関制御が重要であると考え、教室をあげて研究・診療を行っています。私は本学卒業後本学旧第二内科（石井當男教授）に入局して大学院生時代に国内留学させていただいた筑波大

学大学院農学研究科村上和雄教授（当時）・深水昭吉教授の研究室で研究の手ほどきを受け、その後日本学術振興会特別研究員（PD）から日本学術振興会海外特別研究員としてHarvard大学医学部Victor Dzau教授（現在米国医学アカデミー会長）研究室へ海外留学し、ボストンでの研究生活にて幸いにも発見できた新規心腎代謝連関制御因子（ATRAP）に着目した「心腎代謝連関病の統合的理解と包括的治療戦略探求」研究を教室員とともに、前任の当教室主任教授の梅村敏本学名誉教授をはじめとした学内外の多くの先生方によるご指導・ご協力のもとで行って参りました。

最近では、横浜国立大学に分野横断型研究を戦略的に集約した組織としてあらたに設置された総合学術高等研究院（Institute for Multidisciplinary Sciences（略称：IMS））にもIMS - 次世代ヘルステクノロジー研究センター 副センター長・IMS客員教授として参画し、医工連携を軸としての地域実証型研究にも取り組んでいます。このように、今後も「高齢化社会の心腎代謝連関病に対する未病からの基礎研究 - ICT/IoT/EHR/PHR/AI利活用 - 診療連携体制構築へのシームレスな研究展開をテコに健康長寿向上を図る！」をテーマとして、高峰譲吉賞に恥じぬようにこれからも精進していきたくと思いますので、今後ともご指導いただきたく何卒宜しくお願い申し上げます。

高齢化社会の心腎代謝連関病に対する
未病からの基礎研究-ICT/IoT/EHR/PHR/AI利活用-診療連携体制構築への
シームレスな研究展開をテコに健康長寿向上を図る！



中山 幸輝 先生（東京大学医学部附属病院 循環器内科）

受賞研究テーマ

「自律神経支配と免疫応答の個人差が生む心不全発症機序の解明」



略歴

平成 16 年（2004 年）	東京大学医学部医学科 卒業
平成 18 年（2006 年）	東京大学医学部附属病院初期臨床研修 修了
平成 21 年（2009 年）	日本赤十字社医療センター後期研修 修了
平成 21 年（2009 年）	東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻 入学
平成 25 年（2013 年）	東京大学大学院医学系研究科 博士課程修了
平成 27 年（2015 年）	東京大学医学部附属病院 循環器内科助教

—— 受賞によせて ——

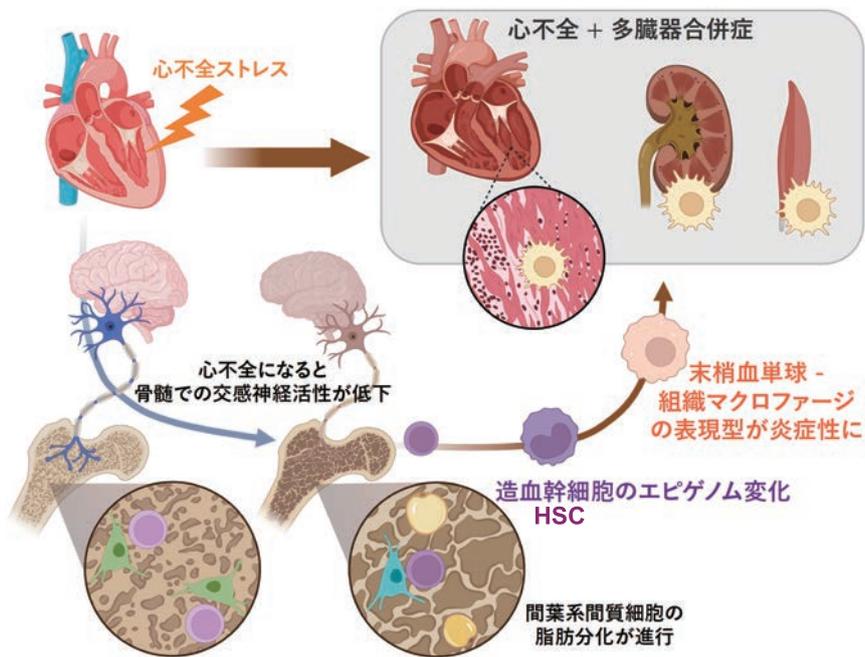
この度は高峰讓吉研究奨励賞の栄誉に授かることになりまして、光栄に存じます。日本心血管内分泌代謝学会において、若手研究奨励賞を頂いたことは研究を続ける励みになりました。時を経て、高峰讓吉先生の名を冠した研究奨励賞の受賞は、なお一層今後の研究を続ける意欲に繋がりと、学会への貢献にも微力ながら目指していきたいと考える所存です。

私は循環器内科医として後期研修を終えてから、大学院に入って基礎研究を本格的に始めることになりました。永井良三教授、眞鍋一郎先生のご指導のもと、様々な分子生物学的アプローチを学び、幾つかのトレーニングを経て、マクロファージにおける機能的な長鎖ノンコーディング RNA の探索を行うことになりました。当時は次世代シーケンサーの性能、解析方法が年々進化していく中、最先端の研究報告にキャッチアップするようなデータの蓄積が得られたことに、非常に基礎研究の楽しみを感じておりました。それと並行して、心臓に存在する組織マクロファージの臓器特異的な発現様式、機能に興味を持つようになり、網羅的発現解析などを経て、徐々に現在のテーマに繋がる研究へと変遷していきました。永井良三先生が退官後は、小室一成教授のご指導を受け、また藤生克仁先生のもと、より心不全の病態解明に繋がる研究を意識するようになりました。当初は、心不全の研究として、骨髄の造血レベルで変化するという考えも及ばず、老化研究に注力していたのですが、心不全マウスの骨髄を移植した実験結果について小室教授に研究報告した際に、興味を持っていただけたことが現在の研究を推進する糧にもなりました。造血幹細胞の研究においては、どのように細胞を同定するのが流儀なのかも分からず、学外の様々な先生方のご指導を受けて進めていました。多くの先生方の助言や直接指導の賜物と思えます。

クローン性造血などの血液疾患が心血管病の原因になり得ることが初めて報告されてから 10 年ほど経ちましたが、私は今回、遺伝子変異を伴わなくても心不全になると造血幹細胞のエピゲノムが変わって各臓器の組織マクロファージが炎症性表現型になることを報告いたしました。これによって心不全を発症しやすくなり、他臓器合併症を呈するようになりました。いわゆる慢性

炎症疾患の病態基盤の一つとして、造血幹細胞レベルでの自然免疫記憶が関与していると考えます。造血幹細胞が一様に変化するのか、やはり特定のクローンが増殖しやすくなるのか、さらには心不全の発症においては個人差が大きい、その背景として骨髄ニッチや免疫反応の個人差があるのではないかと考えます。同時に、ヒトの心不全症例における造血幹細胞の解析も始めていますが、ヒトの解析においては一筋縄ではいかないことも多く、いろいろな解析技術を組み合わせる必要があると感じています。将来的には、発症前段階での慢性炎症疾患のリスク評価や、これまでにない治療標的の同定を目指していますが、今後も様々な先生方のご協力、ご指導が必要であることをより強く感じる次第です。さらなるご指導を賜りますようお願い申し上げます。

心不全時の骨髄の構造的リモデリングがHSCの免疫記憶を引き起こす



三島 英換 先生 (Helmholtz Zentrum München, Senior Scientist /
東北大学大学院医学系研究科 腎膠原病内分泌内科学 非常勤講師)

受賞研究テーマ

「ビタミンKとコエンザイムQ10を介したフェロトーシスの制御機構」



略歴

2006年	東北大学医学部卒業
2013年	東北大学大学院医学系研究科博士課程終了
2014年	東北大学 東北メディカル・メガバンク機構 助教
2017年	東北大学病院 腎高血圧内分泌内科 助教
2019年	東北大学病院 腎高血圧内分泌内科 院内講師
2020年	Helmholtz Zentrum München, Scientist

—— 受賞によせて ——

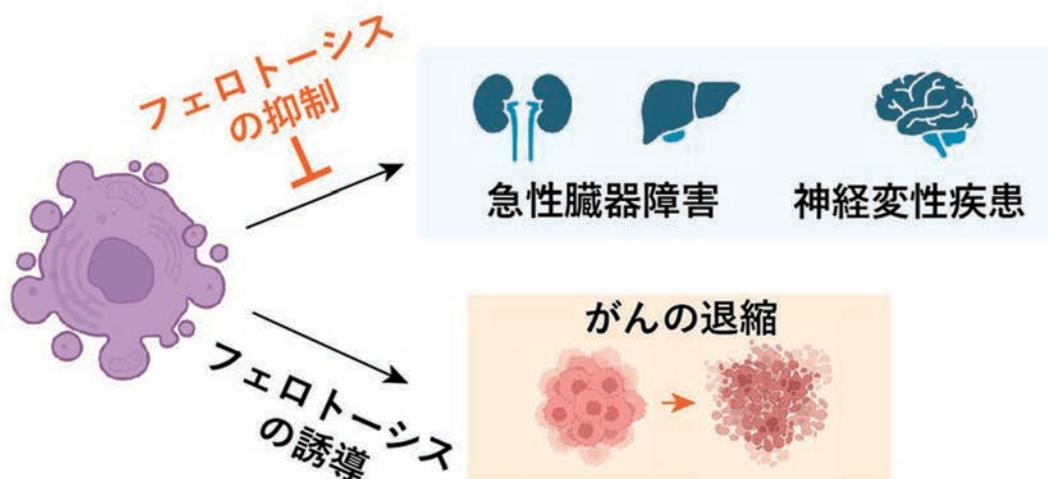
この度、高峰讓吉研究奨励賞を受賞させていただくことができ、学会関係者の皆様およびこれまで私の研究を支えてくださった多くの先生方に深く感謝いたします。東北大学を卒業後は、医師として臨床と研究を並行して、血行動態と高血圧、腎臓と腸内細菌叢の臓器連関を主なテーマに研究してきました。研究している過程で、細胞内のレドックスの破綻によって生じる細胞死の事象に強い興味をもったことでフェロトーシスの研究をはじめ、2020年からはドイツのヘルムホルツセンターミュンヘンに留学し、現在は主にフェロトーシスの制御機構と創薬応用について研究を行っています。

受賞テーマでもあるフェロトーシスは、脂質過酸化依存性の細胞死でありアポトーシスとは異なった制御性細胞の一種です。近年、腎臓や心臓の急性臓器障害、神経変性疾患、抗がん薬感受性等への病態関与が知られ創薬標的として注目されています。そのためフェロトーシスの制御機構の解明は、これらのフェロトーシスが関連する病態への治療につながることを期待されています。フェロトーシスの細胞内リン脂質の脂質の過酸化は、「鉄・脂質組成・抗酸化システム」の3要因のバランスで主に規定され、その制御の破綻として生じます。したがって、組織/細胞内代謝・栄養代謝（ビタミン類を含む）・微量元素の変化などはこれらの制御要因に影響を及ぼすことでフェロトーシスに影響を及ぼします。

私のこれまでの研究テーマを振り返ると、臨床・基礎研究にわたって、腎臓、高血圧、腸内細菌叢、臓器連関、そしてフェロトーシスと一見多岐にわたっています。しかし、改めて自分が何に興味をもって研究してきたかを顧みると「生体が如何に巧妙な仕組みで生体恒常性を維持しており、その破綻が病気を引き起こす」のかを解明したいということにほかなりません。これは、本学会の理念の一つである臓器連関や全身の代謝制御といった面にも通じる面があるかと思えます。また、フェロトーシスの研究から、これまで分子正体が同定されていなかった、ワルファリン非感受性のビタミンK還元酵素や、細胞内の微量元素セレンウムの運搬タンパク質が同定されましたが、これらはいままで正体が分からなかった分子がフェロトーシスという切り口から予

想外に見つかったものです。日本心血管内分泌代謝学会は一臓器にとどまらず多臓器、多疾患を対象とする研究をまたぐ懐の広い学問体系かと思います。このような専門性の異なる知識同士の出会いから生まれる予想外の知見を大事にし、さらなる新しい展開や潮流へと広げていきたいと思っています。

病態・創薬標的としてのフェロトーシス細胞死



ヘルムホルツセンターミュンヘンのラボの仲間たちと：論文パブリッシュの祝杯

野村 征太郎 先生 (東京大学医学部附属病院循環器内科
先端循環器医科学講座 特任准教授)

受賞研究テーマ：

「循環器学における精密医療の発展」



略歴

2005年	千葉大学医学部医学科	卒業
2007年	聖路加国際病院	初期臨床研修修了
2009年	聖路加国際病院	内科臨床研修終了
2013年	千葉大学大学院医学研究院	循環器内科 大学院博士課程修了
2013年	東京大学大学院医学系研究科	循環器内科 特任研究員
2016年	東京大学大学院医学系研究科	重症心不全治療開発講座 特任助教
2023年	東京大学大学院医学系研究科	先端循環器医科学講座 特任准教授

—— 受賞によせて ——

この度、中尾一和先生の御名前を冠した賞を受賞するという大変な栄誉に浴し、光栄に存じるとともに、身に余る思いであります。私は大変未熟なもので、これまで多くの方々に支えられて、ようやくここまでやってくることができました。

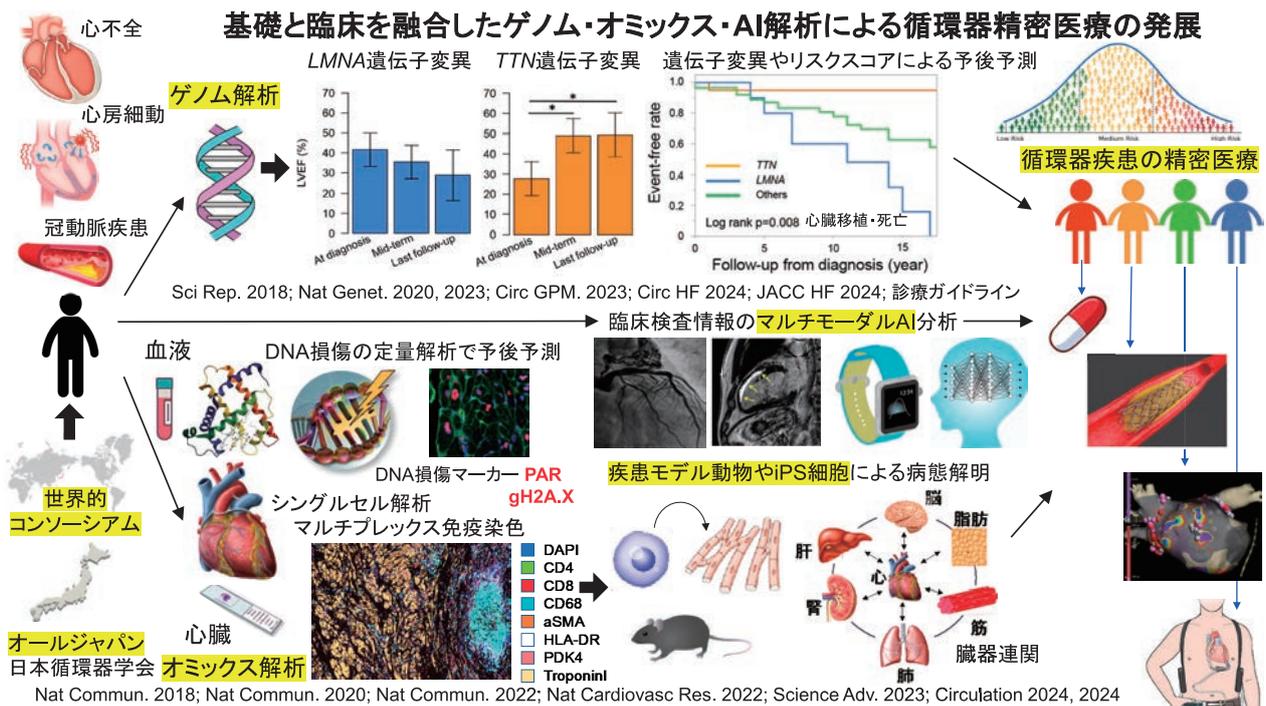
小室一成先生には、私が千葉大学医学部の在学時から、20年以上お世話になっております。常にお父さんのような優しい眼差しで辛抱強くご指導くださり、Physician Scientistのあるべき姿を見せていただいております。私が聖路加国際病院における臨床研修（内科・循環器研修）を終えて千葉大学の大学院に入学した当時から、ずっと小室先生は「患者さんのためになる研究をしよう」とおっしゃっていました。私は患者さんの貴重な検体から少しでも疾患発症の分子機序を理解できるよう、大学院生の頃から東京大学先端科学技術研究センターの油谷浩幸先生にお世話になり、ゲノム解析・シングルセル解析の技術開発に取り組んできました。

ゲノム解析では、心不全の原因として重要な心筋症に着目し、LMNA 遺伝子変異が予後の悪い拡張型心筋症の特徴であることを明らかにすることができました (Sci Rep. 2018)。この結果に基づいて、心筋症診療ガイドライン (2019年)・循環器遺伝学的検査ガイドライン (2024年、ガイドライン作成班員) において LMNA 遺伝子変異の検出が Class I と高く推奨されることとなりました。さらに後述するシングルセル解析によって、LMNA 遺伝子変異で生じる変異 Lamin A/C タンパク質が転写因子 TEAD1 や VDR を核膜にトラップして転写プログラムの破綻を誘導することを発見しました (Science Adv. 2023; Circulation 2024)。

循環器は心臓や血管における多彩な細胞種の相互作用によって構成されており、その病態を解析するために私は10年以上前から独自にシングルセル解析技術を開発してきました。心臓シングルセル RNA-seq 解析を確立して心筋 DNA 損傷が心不全の原因であることを解明し (Nat

Commun. 2018)、不整脈を誘発するドパミン D1 受容体陽性心筋 (Nat Commun. 2020)、心筋を保護する HTRA3 陽性線維芽細胞 (Nat Commun. 2022) を同定しました。さらに空間オミックス解析によって心筋梗塞境界部の CSRP3 陽性心筋を発見し (Nat Cardiovasc Res. 2022)、シングルセル RNA-seq と血液プロテオームを統合して重症心不全マーカーとして IGFBP7 を同定し、これに対するワクチン治療法を開発しました (Circulation. 2024)。

臨床と基礎の最先端を知らながら自ら新しい医学を創っていくことができる Physician Scientist は最高の職業だと思っています。今後さらに Human Cell Atlas や HuBMAP などの世界的コンソーシアムと連携し、基礎と臨床の垣根を無くした融合的な研究により、世界規模で循環器疾患の精密医療の構築に取り組んで参ります。そして同定された分子機序を標的としたワクチン治療・遺伝子治療・核酸医薬など新規治療法を開発するとともに、より一層、教育・人材育成に力を入れ、わが国の医学・循環器研究が世界最先端と渡り合えるよう全力で取り組んで参ります。受賞式典の際に中尾一和先生がおっしゃったように、トランスレーショナル研究をさらに深化できるように日々精進を進めて参ります。引き続きご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



内田 尚宏 先生（九州大学大学院医学研究院病態制御内科学分野）

受賞演題

「糖質コルチコイド過剰による ACTH 欠乏は、副腎皮質細胞にミトコンドリア機能障害に起因するアポトーシスをもたらす」



略歴

2016年3月	京都大学医学部医学科卒業
2016年4月	京都医療センター初期研修開始
2018年4月	京都医療センター内科専攻医開始
2020年4月	九州大学大学院医学研究院病態制御内科学分野 大学院入学
2024年10月	九州大学大学院医学研究院病態制御内科学分野 特任助教就任

— 研究内容および抱負 —

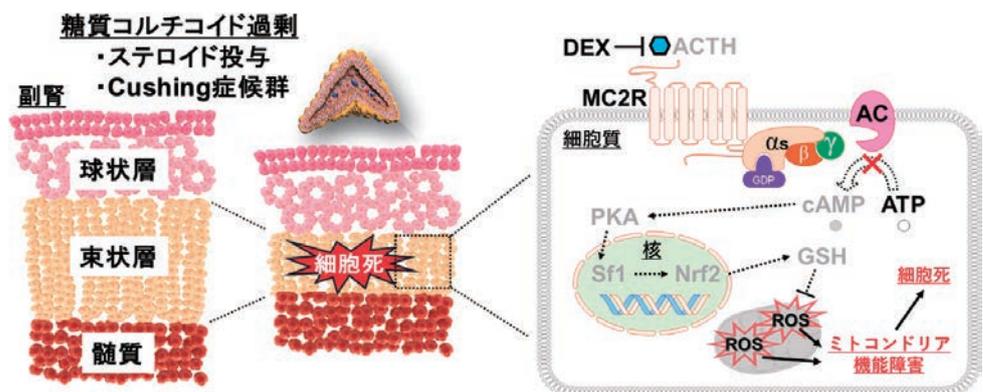
この度は、第28回日本心血管内分泌代謝学会において若手研究奨励賞という大変栄誉ある賞を賜り、心より光栄に存じます。本研究では、糖質コルチコイド過剰が引き起こす副腎不全のメカニズムに焦点を当てました。特に、デキサメタゾン投与による副腎束状層のミトコンドリア障害と細胞死の関係について検討しました。

マウスモデルを用いた解析の結果、副腎束状層においてミトコンドリアの形態異常と細胞死が顕著に観察されました。さらに、副腎細胞においてミトコンドリア由来の活性酸素種（ROS）の顕著な増加が確認され、ROS阻害剤の投与によってミトコンドリア障害と細胞死が緩和されました。これにより、デキサメタゾンはROS依存的な細胞死を誘導することが示唆されました。

さらに、デキサメタゾンと同時にACTHを投与すると、これらの障害が消失したことから、ACTH欠乏がROS蓄積を引き起こす主因であることが明らかになりました。加えて、単一細胞RNAシーケンス（scRNA-seq）解析を行った結果、ACTHが欠乏した束状層細胞では抗酸化酵素の遺伝子発現と転写因子NRF2の活性化が低下していることが分かりました。さらに、副腎細胞株を用いた検討により、ACTHシグナルの下流にあるcAMP-PKA経路がNRF2依存的な抗酸化酵素の発現を制御していることを明らかにしました。

これらの結果を総合すると、糖質コルチコイド過剰によりACTHの分泌が低下すると、副腎束状層における抗酸化酵素の発現低下を介してROSが蓄積し、ミトコンドリア障害と細胞死が引き起こされ、副腎不全へと至ることが示されました。このメカニズムの解明は、副腎不全の新たな予防・治療戦略の開発につながる可能性を示唆しています。

この度の受賞に際し、日頃よりご指導いただいております小川佳宏教授、河村菜実子先生に心より感謝申し上げます。今後も本研究をさらに発展させ、心血管内分泌代謝学の発展に貢献できるよう尽力してまいります。



小林 秀樹 先生 (信州大学医学部附属病院循環器内科)

受賞演題

「ヒト iPS 細胞由来心筋細胞の移植による非ヒト霊長類の心臓再生治療」

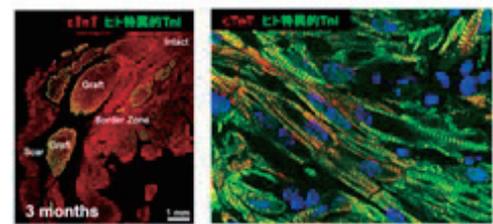
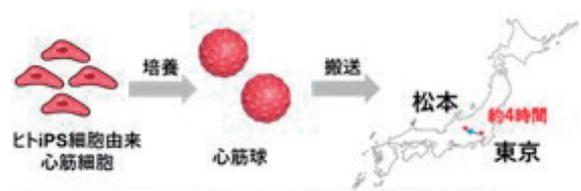


略歴

2010年	筑波大学医学専門学群医学類卒業
2010年	長野赤十字病院・初期臨床研修医
2012年	信州大学医学部附属病院循環器内科・医員
2013年	信州上田医療センター循環器内科・医員
2016年	信州大学医学部附属病院循環器内科・診療助教
2021年	信州大学医学部大学院博士課程修了

— 研究内容および抱負 —

この度は大変栄誉な賞にご選出頂き、誠に有難うございます。大会長の小川佳宏先生並びに選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。私は重症心不全患者に対するヒト iPS 細胞由来心筋細胞 (iPSC-CM) 移植による心臓再生治療について研究をしております。これまで、グラフトの長期生着や不整脈に関する懸念から、iPSC-CM 移植の臨床応用の実現可能性は不明のままでした。そこでヒト iPSC-CM を集簇させた「心筋球 (iPSC-CS)」を作製し、心筋梗塞モデルのカニクイザルの心臓へ直接注入することによる心臓再生治療について検証を行いました。まず移植の2週間前に10匹のカニクイザルに心筋梗塞を作製し、 2×10^7 個のヒト iPSC-CM を含む iPSC-CS (低用量 CS 群) または生理食塩水 (生食群) の移植を行いました。移植12週後に心臓の組織学的分析を行い、観察期間中に心機能と不整脈のモニタリングを行いました。次により多くの iPSC-CM (6×10^7 個) から作製した iPSC-CS (高用量 CS 群) と生食群において、長時間の搬送を経た後、同様の手順で移植を行いました。低用量 CS 群では生食群と比較して移植後に心機能の一時的な改善を認め、1頭の動物のみ移植後に心室性不整脈が確認されました。高用量 CS 群では低用量 CS 群に比べてグラフトの生着が大幅に改善され、長期的な収縮能の改善効果が示されました。移植後の不整脈はわずかに増加しましたが、その発生率は過去の報告より大幅に低いものでした。以上の結果から、ヒト iPSC-CS の心筋直接注射による移植法は、移植後の不整脈のリスクを許容範囲内に抑えながら、損傷した非ヒト霊長類の心臓の収縮能を回復できることが実証されました。これらの知見は、ヒトへの臨床試験を進めるための基礎となると考えられました。今回の受賞を励みとして、引き続き心臓再生治療の研究に邁進していく所存です。最後になりましたが、日頃からご指導くださる柴祐司先生、桑原宏一郎先生をはじめ、研究をサポートくださる多くの先生方並びにスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。今後とも何卒御指導・御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



- 細胞の長期生着に成功
- 移植後の心機能を改善
- 不整脈はほとんど出現せず

相馬 雄輔 先生 (藤田医科大学 臨床再生医学講座 / 慶應義塾大学 循環器内科)

受賞演題

「移植後ヒト iPS 細胞由来心筋組織と未分化 iPS 細胞由来奇形腫の代謝プロファイル解析とその応用」

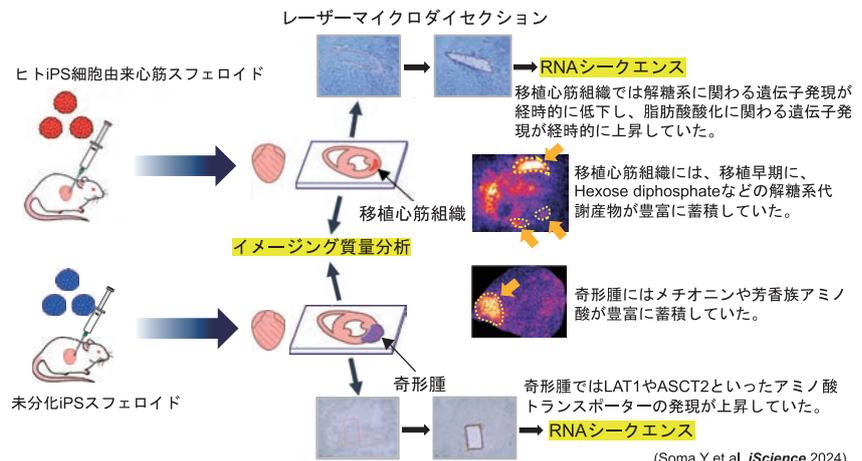


略歴

- | | |
|----------|--------------------|
| 2013年3月 | 慶應義塾大学医学部卒業 |
| 2017年4月 | 慶應義塾大学 循環器内科 助教 |
| 2021年4月 | 日本学術振興会 特別研究員 DC2 |
| 2022年10月 | 慶應義塾大学 予防医療センター 助教 |
| 2024年4月 | 藤田医科大学 臨床再生医学講座 助教 |

— 研究内容および抱負 —

この度は第28回日本心血管内分泌代謝学会 YIA を賜り、誠にありがとうございます。大変光栄に存じます。私は、移植後ヒト iPS 細胞由来心筋組織と未分化 iPS 細胞由来奇形腫の代謝プロファイル解析とその応用について発表しました。ヒト iPS 細胞由来心筋細胞を用いた細胞移植治療は、重症心不全の新たな治療法として期待されています。分化誘導当初の心筋細胞は胎児心筋と同等に未熟であり、移植後に、特に代謝的にどの程度成熟するかはこれまで評価されていませんでした。そこで、免疫不全マウスの心臓にヒト iPS 細胞由来心筋細胞を移植して、経時的に解剖を行って心臓組織切片を作製し、移植心筋組織に対して RNA シークエンスとイメージング質量分析を行いました。移植心筋組織の RNA シークエンスでは、解糖系の遺伝子発現は経時的に低下し、脂肪酸酸化の遺伝子発現は経時的に上昇しました。イメージング質量分析では、移植2週後の移植心筋組織には解糖系代謝産物が多く蓄積していましたが、移植12週後にはホスト心筋と同程度まで低下しました。これらの結果は、移植心筋組織の代謝が解糖系から脂肪酸酸化にスイッチすることを示しています。これは出生後の心臓の代謝変化と同様であり、移植心筋組織の代謝的な成熟が示唆されました。また、移植細胞に未分化 iPS 細胞が残存していると移植後に奇形腫が形成される可能性があり、移植後の奇形腫を早期に検出できる非侵襲的イメージング法が求められています。未分化 iPS 細胞を免疫不全マウスの心臓に移植し奇形腫を形成させて RNA シークエンスとイメージング質量分析を行ったところ、奇形腫はアミノ酸トランスポーターの発現が高く、メチオニンや芳香族アミノ酸がホスト心筋と比べて2倍以上蓄積していました。芳香族アミノ酸であるフェニルアラニンから誘導した¹⁸Fフルオロフェニルアラニンを投与したところ、皮下の奇形腫に集積がみられ、その集積は骨格筋への集積と比較して有意に高くなり、皮下や骨格筋内の奇形腫を検出できることが示唆されました。今後心臓再生医療の発展につながる研究を行えたらと思っています。



西村 絵里那 先生（慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科）

受賞演題

「近位尿細管上皮細胞における DNA 損傷修復は全身の代謝変容を惹起する」



略歴

2016年3月 慶應義塾大学医学部卒業
2016年～2018年 独立行政法人国立病院機構東京医療センター 初期臨床研修医
2018年4月 慶應義塾大学医学部内科学教室入局
2020年4月 慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科 助教
2023年4月 慶應義塾大学医学部医学研究科 入学

— 研究内容および抱負 —

この度は、第28回日本心血管内分泌代謝学会 YIA にご選出いただき、ありがとうございました。このような大変名誉な賞をいただき、本心血管内分泌代謝学会ご関係者の方々、ご指導いただいた先生方から心より御礼申し上げます。

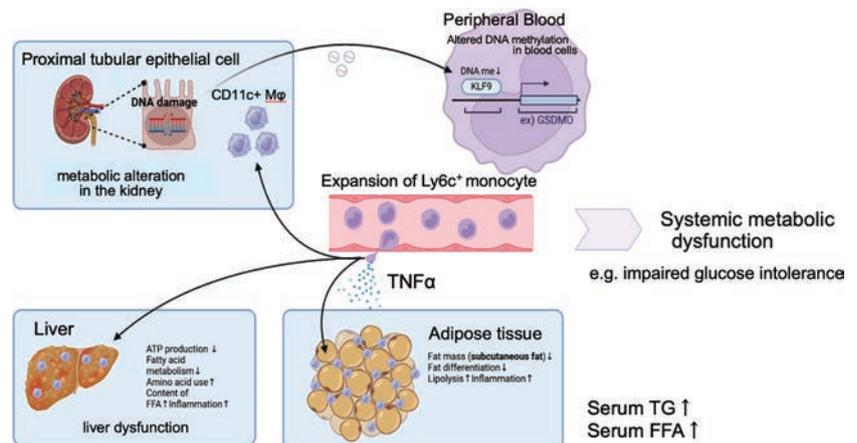
近年、DNA 損傷修復とエピゲノム変化は疾患や老化との関連が報告されており、私共のグループは、腎臓ポドサイト DNA 損傷が CD8+ メモリー T 細胞増加を惹起し、腎臓病病態に関与することを報告しました (Cell Rep 2023)。一方、近位尿細管上皮細胞 (PTEC) は高い代謝活性と増殖能を持つ点で、終末分化細胞であるポドサイトと異なっており、DNA 損傷修復経路は細胞種特異性が高いことから、PTEC の DNA 損傷の影響を検討しました。

まず、PTEC 特異的に DNA 切断酵素 I-PpoI を発現させ二本鎖 DNA 損傷を惹起するマウスを作成したところ、16 週齢前後から野生型と比較し有意な体重・脂肪重量減少のほか、肝機能障害、高 TG 血症、耐糖能異常、異所性脂肪沈着などの代謝異常を認めることができました。さらなる検討の結果、近位尿細管の DNA 損傷が、腎臓において活性化マクロファージを誘導するのみならず、末梢血血球細胞の DNA メチル化変化を介して、肝臓・脂肪組織においても活性化マクロファージを誘導し、肝脂肪滴増加や脂肪組織線維化、脂肪分化障害を来すことが明らかになりました。さらに、ヒト腎生検検体を用いた検討では、糖尿病性腎症・糖尿病合併腎炎において PTEC の DNA 損傷程度が有意に高く、末梢血血球細胞の DNA メチル化変化および脂肪肝指数 (HSI) との関連を認めました。

本研究により近位尿細管上皮細胞の DNA 損傷に端を発する新たな腎臓-血液-代謝連関が示され、近位尿細管上皮細胞の DNA 損傷が腎予後予測および代謝障害合併の指標となる可能性が示唆されました。今後はさらに詳細なメカニズムの解明を進めるとともに、ヒトデータを用いて臨床的意義を追求し、この

研究が、高齢化社会において加齢と共に発症頻度の増加する腎障害および代謝疾患の病態解明と、マクロファージ活性化を介した炎症の制御を標的とした新たな腎臓病治療戦略の開発に繋がることを目標に、日々研究を進めて参りたいと考えております。

最後になりますが、日本心血管内分泌代謝学会ご関係者の方々、指導教員の林教授をはじめ、研究室の先生方や共同研究者の方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



和田 恵梨 先生（名古屋大学環境医学研究所 分子代謝医学分野 特任助教）

受賞演題

「非アルコール性脂肪性肝炎の病態進展における神経・免疫・代謝連関の意義」



略歴

- 2012年 京都府立大学生命環境学部卒業
- 2014年 新潟大学大学院医歯学総合研究科 修士課程修了
- 2014年 新潟県職員 管理栄養士職
- 2021年 群馬大学大学院医学系研究科 博士課程修了
- 2021年 名古屋大学環境医学研究所 特任助教

—— 研究内容および抱負 ——

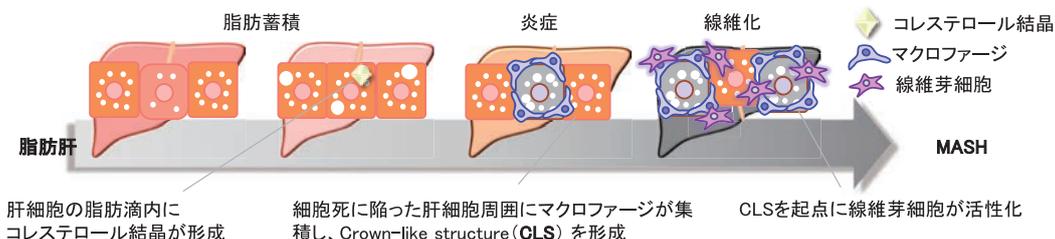
この度は第28回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞を賜り、誠にありがとうございます。審査委員の先生方、並びに学会の関係者の皆様に、厚くお礼申し上げます。

わたしは修士課程卒業後、管理栄養士として病院で勤務し、臨床現場での栄養管理に従事してまいりました。その中で、科学的根拠が十分でない状況に直面することが多々あり、病態栄養学の基礎研究を進展させる重要性を痛感し、研究者を志しました。栄養は二次予防のみならず、一次予防が可能な分野であり、栄養代謝障害による疾病の発症機序を正しく解明し、健康的な食事を提案したいと目標を持っております。

今回の受賞研究は、まさに、栄養のインバランスが引き起こす代謝障害が、非アルコール性脂肪性肝炎（昨年、疾患名称が代謝機能障害関連脂肪性肝炎；MASHに変更）を発症するまでの機序を明らかにするものであり、精力的に研究を行ってまいりました。

基礎研究に没頭する中、臨床的知見が不足していることを自覚していましたが、今回の学会発表では臨床の観点からの意見も頂戴することができ、非常に貴重な時間でした。改めて、社会に貢献できる研究の重要性を認識し、初心に立ち返ることができました。

今後も更に研究を発展できるように努めます。最後になりましたが、日ごろご指導を賜っております菅波孝祥教授はじめ、研究活動を支えてくださる多くの皆様に深く感謝申し上げます。この度は誠にありがとうございました。



所属研究室で明らかにしてきたMASH病態形成機序

稲住 英明 先生（東京大学医学部附属病院 循環器内科）

受賞演題

「ヒストン脱アセチル化酵素 1/2 の成体心筋における役割とその性差の解明」



略歴

2010 年 3 月 京都大学医学部医学科卒業
2010 年 4 月 京都大学医学部附属病院 初期臨床研修医
2012 年 4 月 兵庫県立尼崎病院 循環器内科後期研修医
2015 年 4 月 京都大学大学院医学研究科
2019 年 4 月 京都大学医学部附属病院 循環器内科 医員
2023 年 4 月 日本学術振興会特別研究員-PD（東京大学医学部附属病院 循環器内科）

— 研究計画および抱負 —

クラス IHDAC（ヒストン脱アセチル化酵素）に属する HDAC1/2 は様々な転写調節因子と複合体を形成することで生体の恒常性維持に寄与していると考えられています。

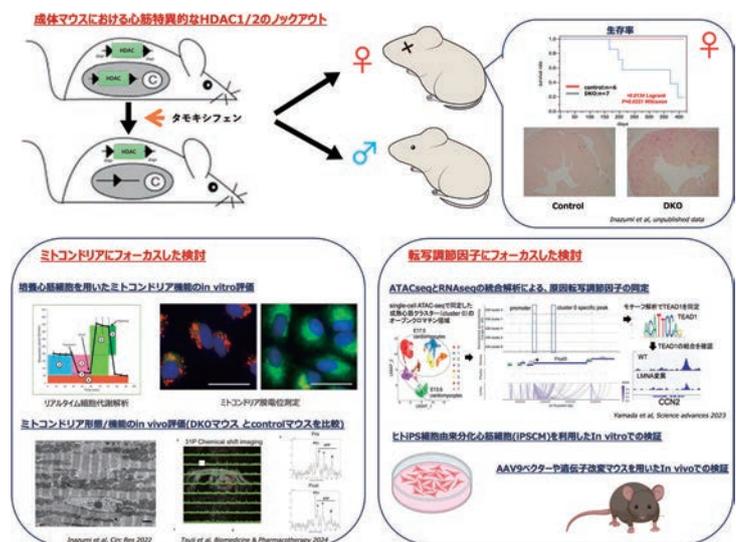
HDAC1/2 の胎生期心筋における欠失が拡張型心筋症様の表現系を呈する（Genes Dev. 2007）一方で抗がん剤としても使用されている HDAC 阻害剤が心筋の病的な肥大を抑制する（Sci Signal. 2016）との報告もあり成体心筋における HDAC1/2 の役割は未だ明らかではないためそれを明らかにすることを目的としました。

HDAC1/2 をタモキシフェン投与により心筋細胞特異的に遺伝子の組み換えを起こす α MHCcre-ERT2-Tg マウスを用いることで成体（8 週齢）において後天的に HDAC1/2 を心筋特異的にノックアウトするマウス（DKO）を作成しその表現系を確認したところ、メスでのみ DKO は著明な心拡大、心収縮能低下、生存率の低下を示しました。（オスも負荷をかけるとコントロールと比較し早期の心収縮能の低下を認めました。）

心室の RNA シークエンスではミトコンドリア遺伝子の広範な発現低下を認めたことから今後はミトコンドリアに着目した実験を行うとともに、ATAC シークエンスを組み合わせることで表現系の変化の原因となる転写調節因子を新たに明らかとし、成体における心筋の成熟とその維持のメカニズム、さらにその性差を明らかにしたいと考えています。

この度は日本心血管内分泌代謝学会におきまして第 1 回若手研究助成を受賞させていただき誠にありがとうございます。これを励みにし、諸先輩方の背中を追いかけながら研究を発展させていきたいと考えております。

トランスレーショナル/リバーstransレーショナルな研究を行える Physician-Scientist として独立することを目指したいと思いますので引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。



和田 恵梨（名古屋大学環境医学研究所 分子代謝医学分野 特任助教）

受賞演題

「交感神経系による肝臓イムノメタボリス制御が MASH 病態形成に及ぼす意義の解明」



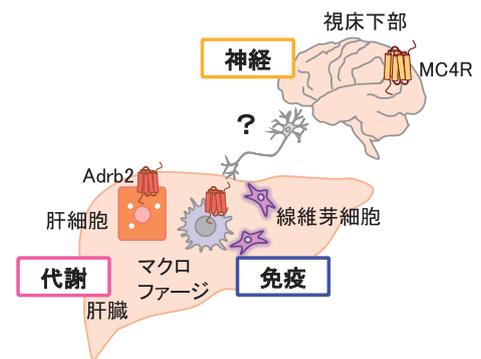
略歴

- 2012 年 京都府立大学生命環境学部卒業
- 2014 年 新潟大学大学院医歯学総合研究科 修士課程修了
- 2014 年 新潟県職員 管理栄養士職
- 2021 年 群馬大学大学院医学系研究科 博士課程修了
- 2021 年 名古屋大学環境医学研究所 特任助教

— 研究計画および抱負 —

この度は第1回日本心血管内分泌代謝学会若手研究助成を賜り、誠にありがとうございました。審査委員の先生方、並びに学会の関係者の皆様に深く感謝いたします。

予後良好の単純性脂肪肝と異なり、非アルコール性脂肪肝炎は慢性進行性に肝硬変や肝がんに至ることから、その対策は喫緊の課題です。昨年、疾患名称が Metabolic dysfunction-associated steatohepatitis (MASH) に変更され、メタボリックシンドロームの肝臓における表現型であることが明確化されました。しかしながら、MASH の発症機序は複雑であり、様々な因子が関与しているといった、Multiple parallel hit 仮説が提唱されています。このため、治療薬の開発も遅れてきました。所属研究室では、MASH 病態形成機序に関する研究を進めており、これまでにメラノコルチン4型受容体 (MC4R) 欠損マウスにおいて、単純性脂肪肝のみならず、MASH を発症することを見出しました (*Am J Pathol* 2011)。MC4R 下流では交感神経が活性化されることから、交感神経系による MASH 病態支配の可能性を考えました。特に $\beta 2$ アドレナリン受容体 (Adrb2) に着目し、実際に交感神経系が病態形成に関与していることを見出しました。本研究課題では、MASH 病態形成とアドレナリンシグナルを結ぶ分子メカニズムの解明を目指します。また病態進行過程における交感神経シグナルの変化の追究も行います。今回の研究助成の採択は、本研究遂行にあたり大きな励みとなりました。本助成によって研究を発展できるよう邁進してまいります。また、今後は日本心血管内分泌代謝学会の学会員として、領域の発展に貢献していきたい所存です。引き続き、ご指導いただきますよう、どうかよろしくお願いいたします。



MASH病態形成における神経・免疫・代謝連関

私たちの研究室では、癌も含めた生活習慣病についての専門知識や基礎研究技術を有しており、世界中の研究者や企業とコラボしております。特に私たちの研究室が中心となって発信している独自の研究テーマとしては、以下のようなものがあります。ここでは、それぞれ簡単に説明させていただきます。

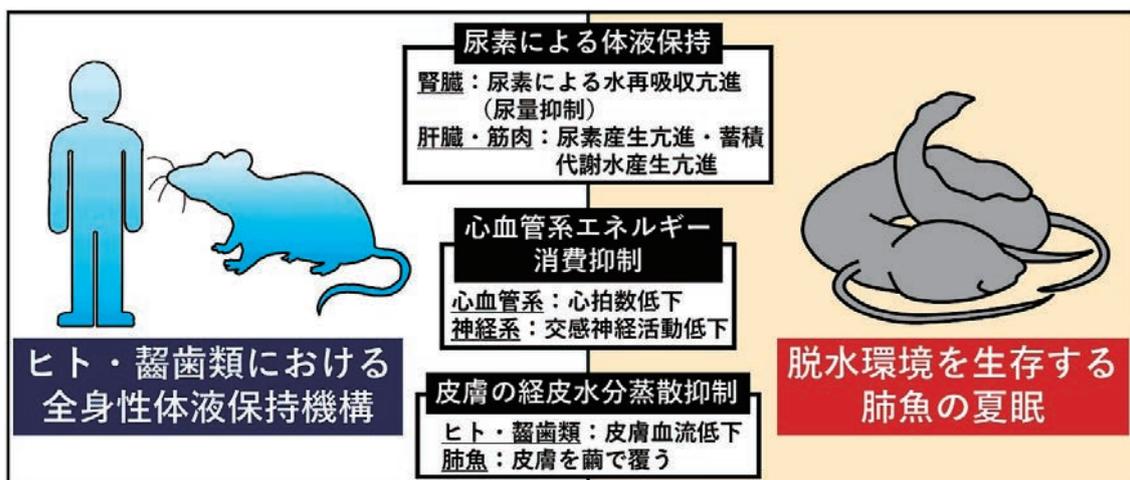
主な研究テーマ：

1. 「カラダの水分量」をターゲットとした健康維持法・治療薬の開発
2. レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の病態への関与の解明と、ATP6ap2 をターゲットとした治療薬の開発
3. 健康や疾患における交感神経活動の役割
4. 栄養や健康に関連するその他の研究
5. イルカの健康を守るための研究

1. 「カラダの水分量」をターゲットとした健康維持法・治療薬の開発

1) 健康と病態における全身性体液保持機構の役割とその制御メカニズムの解明

従来、カラダの水分量は主に腎臓の尿量調節によって制御されていると考えられてきました。我々の研究室は、腎臓だけでなく、皮膚、免疫細胞、肝臓、筋肉、心血管・神経系など様々な臓器・器官が連携し合うことによってカラダの水分量が維持されていることを証明してきました。この多臓器連携による体液保持機構を「全身性体液保持機構」と名付け、癌や生活習慣病、老化における本機構の意義や制御メカニズムの解明を、独自に開発した特殊実験設備・技術（浸透圧応答レポーターシステム、灰化-炎光光度法による体液・電解質含量測定など）を用いて進めています。特に、本機構の異常や破綻が、高血圧や筋萎縮（サルコペニア）を起こすことがわかっています。全身性体液保持機構の異常や破綻が、何故様々な病態を引き起こすのか？そのメカニズムを解明することで、高血圧やサルコペニアなどの現代病に対する新たな予防・治療コンセプトを提唱していきます。



2) カラダの水分保持技術の開発～肺魚の夏眠から学ぶ～

ヒトや齧歯類で発見した全身性体液保持機構の特徴は、「肺魚の夏眠」と似ています。そこで我々の研究室では、「肺魚の夏眠」に対するバイオミメティクス（生物模倣）研究を実施しています。夏眠は、肺魚やカエルなどの生物が乾燥・脱水から命を守るために進化の過程で獲得した休眠能力であり、水が一滴も無い環境で年単位のカラダの水分維持と生存を可能にする究極の体液保持能力です。この肺魚の夏眠能力の制御メカニズムおよび誘導法を研究することで、ヒトに応用できるカラダの水分保持技術の創出を目指しています。

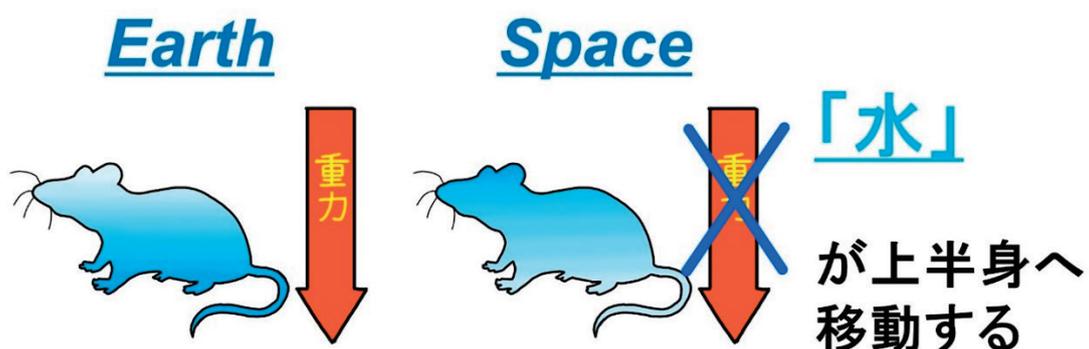
3) 宇宙空間で生じる体液分布変化に対する適応能力の解明 ～JAXA との共同研究～

我々の研究室は、宇宙航空研究開発機構（JAXA）との共同研究により、宇宙空間では微小重力がマウス体内の水分を下半身から上半身へ約 30% も移動させ、体液分布の異常が生じることを発見しました。現在は、ヒトでも同様の体液分布変化や、それに対してどのような適応反応が生じるかなどを検討することを目的とした宇宙実験を実施するため、JAXA と新たに共同研究契約を締結し、NASA や ESA とも協力して宇宙実験の準備を行っています（2026 年度より実施予定）。将来的に、宇宙空間における適切な体液維持法の開発を目指しています。

微小重力が皮膚機能に与える影響
～より健全な宇宙飛行を目指して～

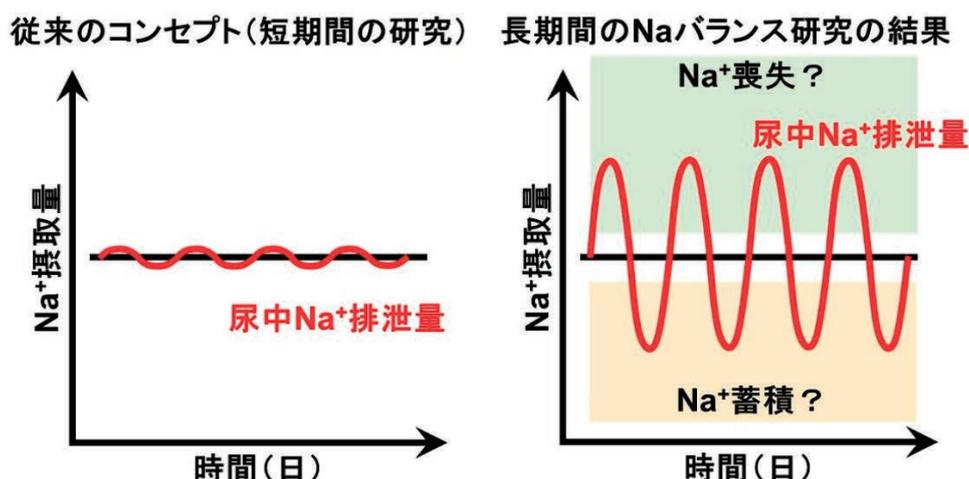
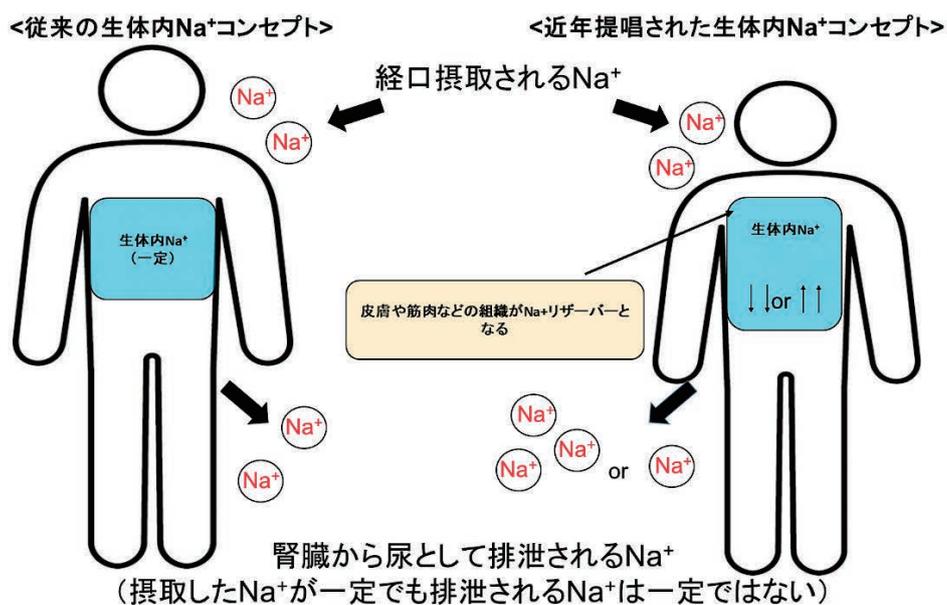
宇宙航空研究開発機構 (JAXA)との
共同研究契約締結

香川大学医学部薬理学・西山成教授の研究が、
JAXA 国際宇宙ステーション (ISS) の
日本実験棟「きぼう」を利用した
マウスサンプルシェアテーマに採択されました。



4) 塩と体液の調節とそのひずみによって生じる病態

これまで、過剰に摂取された食塩は腎臓によって尿中へ排泄されるため、尿中ナトリウム排泄量はナトリウム摂取量とほぼ同等なると考えられてきました。しかしながら、健常人を対象として100日間以上行われた長期間の塩・体液バランス研究では、食塩摂取量を固定しても尿中ナトリウム排泄量は一定とならず、皮膚や筋肉などの組織局所にナトリウム蓄積が生じることが明らかとなっています。どのようにして組織局所にナトリウムが蓄積されるのか？また、過剰なナトリウム蓄積が体にどのような悪影響を及ぼし、病気を引き起こすのか？などの解明を目指しています。最終目標は、「食塩摂取量変化が体に与える影響」および「生体のナトリウム・体液制御機構」の全容を解明し、健康に美味しく塩を食べられる未来をつくることです！

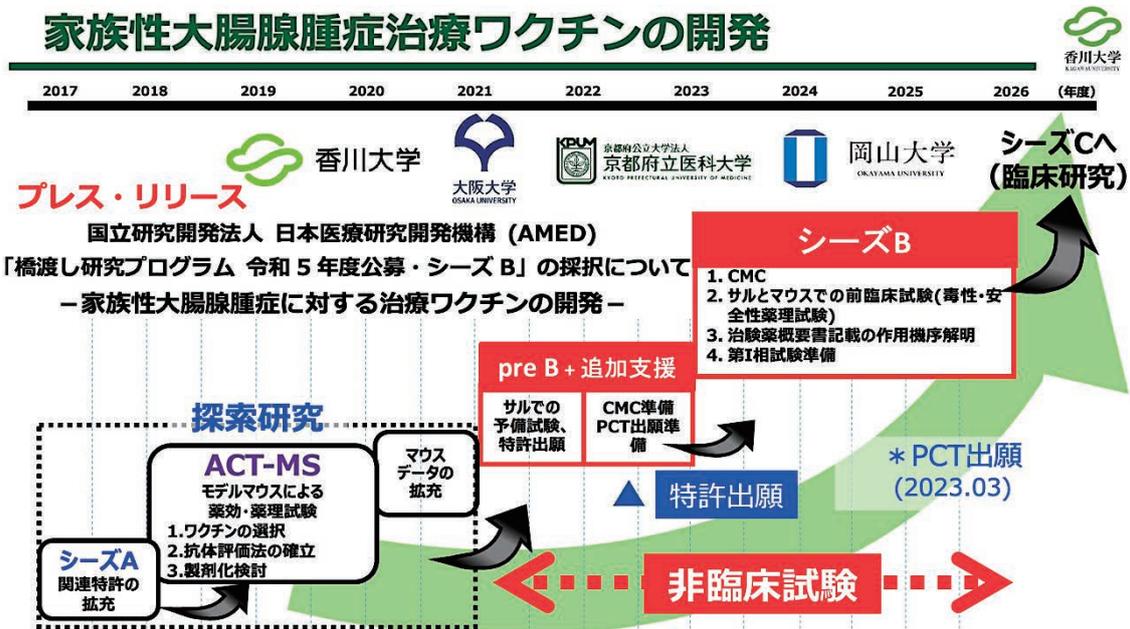


2. レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の病態への関与の解明と、ATP6ap2をターゲットとした治療薬の開発

1) レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の病態への関与の解明

主な活動目標としては、臓器内のレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の制御機構を解明し、また、病態での変化を明らかにすることにより、新しい治療法を開発することです。加えて、腎臓のレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の血中尿中バイオマーカーを同定

し、新しい診断法の開発につなげることも目標として掲げ、研究を進めてまいりました。特にレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の測定システムを構築することによって、世界中の研究施設のサンプル測定による共同研究活動を実施してまいりました。近年では、皮膚のレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系やアルドステロンのミネラルコルチコイド受容体の病態への関わりにターゲットを絞り、研究を進めております。



2) ATP6ap2 をターゲットとした治療薬の開発

レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の (プロ) レニン受容体は 2002 年にレニン・アンジオテンシン系のコンポーネントとして同定されたましたが、その後、ATP6ap2 の遺伝子コードを持ち、Wnt シグナルにも必須の分子であることが見出されました。そこで我々は、Wnt シグナルが深く関わる癌との関わりを疑い研究を開始しています。その結果、膀胱癌、脳腫瘍、大腸癌などで、過剰に発現した ATP6ap2 が Wnt/ β -catenin シグナル経路を活性化し、腫瘍の病態に関わることを発見しました。同時に、ある種の癌患者では血中の可溶性 ATP6ap2 濃度が早期から上昇することを見出しています (特許出願)。また、ATP6ap2 に対する抗体治療の開発を目指し、2017・2018 年度 AMED 創薬ブースターのサポートのもと Wnt/ β -catenin シグナルをブロックし、癌細胞の増殖を抑制するモノクローナル抗体を作製したところ、実験的に癌の増殖を抑制することを明らかにしました (特許出願)。さらに、2018・2019 年度 AMED ACT-MS のサポートのもと ATP6ap2 に対するペプチドワクチンを開発し、家族性大腸腺腫症モデルマウスを用いた探索研究によって、ポリープ増殖の抑制効果を明らかにしました。そこで、2021 年度 AMED 橋渡し研究シーズン preB のサポートによって非臨床試験の PMDA 対面助言を完了させて特許出願を完了しました。2023 年度からは AMED 橋渡し研究シーズン B のサポートを受け、現在、非臨床試験を進めております。

3. 健康や疾患における交感神経活動の役割

全身の循環調節や臓器連関を考える上で、交感神経の役割は切っても切れないものでありますが、当教室はラットやマウスの腎交感神経の切除術を実施したり、その活動を直接測定するテクニックを有している世界でも数少ない研究室です。本実験プロジェクトを担当している藤澤氏ら

は、この領域でのオピニオンリーダーとして活躍していますが、最近では、テレメトリー法を応用して、交感神経活動を覚醒下で長期間持続モニターする技術を開発いたしました。本実験プロジェクトは独自のテクニックを駆使して行われるので、世界中の多くの研究チームに技術提供をし、様々な交感神経活動に関するプロジェクトを展開しています。最近では、香川大学創造工学部の鈴木桂輔教授とヒトにおいて交感神経活動活動をモニタリングし、心の強さレジリエンスの共同研究も開始しており、将来的には連続血圧測定なども組み合わせてウェルビーイングを定量評価できるシステムの構築を目指しています。

4. 栄養や健康に関連するその他の研究

- 1) 香川大学のプロジェクトとして、希少糖の癌を含めた生活習慣病に対する治療薬としての開発を進めています。特に癌治療薬としてのD-アロースの開発は企業とコラボして進めており、臨床応用を目指しています。
- 2) ナトリウムに関するについては上述しましたが、最近、リンの過剰摂取によって生じるサルコペニアや腎臓病についての研究を進めています。また、アミノ酸摂取による生体への影響についても研究を展開しています。
- 3) 香川大学農学部小川雅廣教授とオリーブの葉を使用した食品加工技術の開発しております。さらに、香川大学創造工学部の石丸伊知郎教授とは光を用いた生体成分の解析、石塚正秀教授とはマイクロプラスチックの生体に対する影響同定する研究をそれぞれ進めております。

5. イルカ健康を守るための研究

私たちは飼育イルカの健康長寿を保ち、幸せに生きることを目的として研究を進めています。近年、飼育されているイルカの高齢化が問題となっており、人間と同じように様々な病気を発症するようになりました。まず私たちは、口腔癌を発症している飼育イルカを診察し、その原因を突き止めました。

<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/vcp.12996>

また、高齢飼育イルカでは腎臓病が大きな問題となっているのですが、これまで原因が不明でした。これに対して私たちは、リンの蓄積による石灰化が腎臓病の原因であることを、突き止めました。

<https://www.nature.com/articles/s41598-023-32399-6>

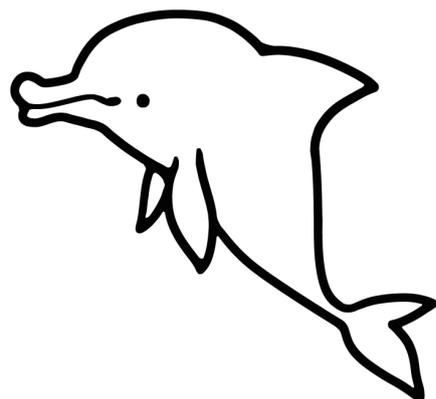
<https://www.kagawa-u.ac.jp/30011/>

<http://www.kms.ac.jp/%7Eyakuri/images/award/sciencenews202305.jpg>

<https://www.asahi.com/articles/ASR623407R5YULBH00F.html>

<https://toyokeizai.net/articles/-/703830>

現在、イルカの腎臓病を早期から検出できる測定技術の開発を進めており、将来的には予防・治療法も確立させたいと考えています。さらに、その他の疾患に対する対策を目的として美ら海水族館でコホート研究を進めており、人間にはないイルカの特長能力についても国際共同研究を開始しております。



2025 年はみんなで海外学会で発表しましょう！

国際医療福祉大学臨床検査医学 教授 下澤 達雄

CVEM 会員の皆様

円安が想像を超えるスピードで進み、インフレもあり、海外学会に参加することが経済的にも難しくなっています。特に若手に発表に行ってもらうのは費用負担を考えると二の足を踏むのもよくわかります。オンラインのころは気軽でよかったなとも思いますが、オンラインだと時差があり、夜中に視聴しなければならない、質問を気軽にできないなどの問題があることも確かです。

そんな中、2024 年には Gordon Research Conference (GRC)、AHA High Blood Pressure Council (AHAHBRC)、AHA2024, International Society of Hypertension (ISH) の4つの CVEM 関連の学会、研究会に出席しました。GRC はレニンアンジオテンシン系に関わる研究会で二年に一度 NIH のサポートの下クロズドで開催されるものです。2024 年はイタリア、フィレンツェ郊外で開催され日本からも数名の参加者がありましたが、決して以前のように大多数ではなかったのは残念です。発表演題はすべて Unpublish のもので 10 分から 20 分の口演発表とポスター発表がありますが、全員同じホテルに 1 週間缶詰めになるので情報交換も盛んですし、質問もゆっくり考えてから空き時間にすることも可能です。レニン産生細胞の細胞生物学から ACE の話題など様々な基礎研究が発表されます。内容は口外しないことをサインしているのでここではご紹介できないのが残念ですが、ぜひ次回 2026 年おそらく米国で開催ですので、そちらにご参加いただき、ご自身の目でご確認ください。GRC の会期前日には GRseminar があり、こちらは PhD candidate や Fresh PhD が発表します。こちらでいい演題だと GRC でも発表することができ、NIH から旅費や参加費が支給されます。

AHAHBRC は日本の高血圧学会発祥のもととなった高血圧に関する AHA の分科会です。9 月にシカゴで行われました。参加者は 900 名ほどの小さい会ですが、高血圧の基礎、臨床に関して主に PhD、循環器内科、腎臓内科の MD が発表します。以前は教育講演や臨床の話題は少なかったのですが、最近は教育講演なども増えて臨床系の MD も楽しめるようになりました。3 日ほどみっちり高血圧の最新の話題を勉強するには最良の場です。日本の高血圧学会と異なるのは妊娠高血圧やメタボローム解析、エピゲノム研究に加え、パイプラインの薬物のデータも紹介されます。また、教科書でしか名前を聞いたことない大御所の先生方が（多くは 80 歳代ですが）、アクティブに自らオリジナルデータを発表したり、若手の発表に示唆に富む質問をしてくれるのも魅力です。もちろんいじわるなお年寄りもいます。。大体の参加者が会場のホテルに宿泊するので朝食や夕食の際に交流を深めることもできます。高血圧の基礎研究はラテン系の研究者が多いのも特徴で、GRC もそうですが、スペイン語ができるとやや有利かもしれません。

そのラテンのパワーが爆発したのは ISH でした。前回は伊藤裕先生会長の下日本で 3 回目になる ISH が京都で開催されました。CVEM も向山先生の会長の下 ISH 同時開催したのは記憶に新しいところです。2024 年は 10 月にカルタヘナ条約で有名なコロンビアのカルタヘナで行われましたが、毎晩参加者が遅くまで語り合い、踊り、呑むのも楽しい会でした。ISH は多くが臨床的な話題で、各国のガイドラインや疫学調査の結果なども発表されるため、基礎研究のネタ探しや

臨床応用の方向性を探るのにはいいかもしれません。こちらも GRC 同様二年に一度の開催です。

最後に 11 月にまた、シカゴでしたが、AHA の総会がありました。100 周年ということで様々な企画がありましたが、CKD をこえて Cardio-Metabolic Nephrology の概念にそった臨床演題や基礎研究が多く発表されていたのは CVEM の今後を考えるうえで大変参考になりました。また、新しい薬剤に関連して多くの心不全の演題がありましたが、パイプラインにあるアルドステロン合成阻害薬やリポ蛋白 (a) 関連の演題も目立ちました。AHA も心臓のみならず腎臓、血管、動脈硬化と幅広い分野を吸収してさらに発展を目指していることがよくわかります。こちらの学会では Pechakucha というセッションにて食塩感受性高血圧とナトリウム輸送体についてプレゼンテーションをしました (図)。Pechakucha とはその名が示すように日本が発祥なのですが、医学の領域ではあまり知られていない新しいプレゼンテーション方式です (<https://www.pechakucha.com/>)。Ted は皆様にもなじみがあるかと思いますが、こちらはさらにルールが厳しく 20 枚のスライドで一枚 20 秒でプレゼンします。強制的にスライドが送られてしまうためかなりの練習が必要ですが、聴いている方はだらだらしたつまらないプレゼンテーションより刺激的で時差ボケも忘れて楽しむことができました。終わった後に聴衆が投票で勝者が決まるのですが、僕が勝てるわけがないのはご想像の通りです。ちなみにこのプレゼンテーション資料を集めるために前の日にシカゴ美術館やシカゴの建築、シカゴ交響楽団で写真を撮って発表のために 9 時間以上かけたのですが、到底かないませんでした。。。

2025 年は GRC、ISH はありませんが、AHAHBRC はボルティモアで 9 月 4 日-7 日 (<https://professional.heart.org/en/meetings/hypertension>) 抄録受付は 5 月 21 日まで、AHA はニューオリンズで 11 月 7 日-10 日 (<https://professional.heart.org/en/meetings/scientific-sessions>) 抄録受付は 6 月 5 日までです。

学会会場あるいは周辺の店で皆様とお会いするのを楽しみにしております。



図 To solve the problem, I changed the direction. Different ways of thinking give us new ideas.

日本心血管内分泌代謝学会役員名簿

■理事長

吉村 道博 東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

■副理事長

小川 佳宏 九州大学大学院医学研究院病態制御内科学

■理事

市原 淳弘 東京女子医科大学内分泌疾患総合医療センター高血圧・内分泌内科

桑原宏一郎 信州大学医学部循環器内科学教室

下澤 達雄 国際医療福祉大学成田病院臨床検査科

新藤 隆行 信州大学医学部医学科循環病態学教室

菅波 孝祥 名古屋大学環境医学研究所分子代謝医学分野

田村 功一 横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学

長瀬 美樹 杏林大学医学部肉眼解剖学

西山 成 香川大学医学部薬理学

深水 昭吉 筑波大学生存ダイナミクス研究センター

益崎 裕章 琉球大学大学院医学研究科内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)

南野 徹 順天堂大学大学院医学研究科循環器内科

柳沢 正史 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構(WPI-IIIIS)

■監事

岸 拓弥 国際医療福祉大学福岡保健医療学部

徳留 健 横浜市立大学医学部薬理学

■幹事

小豆島 健護 横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学

有馬 勇一郎 熊本大学国際先端医学研究機構

曾根 正勝 聖マリアンナ医科大学代謝・内分泌内科

■名誉会員【36名】

荒川規矩男	伊藤 貞嘉	稲上 正	井村 裕夫	岩尾 洋	梅村 敏	江藤 胤尚
荻原 俊男	片山 茂裕	寒川 賢治	木之下正彦	小島 至	齊藤 壽一	島本 和明
鈴木 洋通	高橋 伯夫	竹田 亮祐	田中 一成	富田 公夫	永井 良三	中尾 一和
中川 雅夫	成瀬 光栄	名和田 新	平田結喜緒	藤田 敏郎	眞崎 知生	松岡 博昭
南野 直人	宮森 勇	村上 和雄	矢崎 義雄	泰江 弘文	吉永 馨	吉見 輝也
吉村 学						

■功勞評議員【125名】

芦澤 直人	安部 陽一	荒井 宏司	飯利 太朗	池本 文彦	石川 三衛	石川 義弘
石田 均	石橋みゆき	伊東 宏晃	伊藤 宏	伊藤 裕	井上 元	井上 達秀
今城 俊浩	岩崎 泰正	岩本 安彦	上田 陽一	臼井 健	内田 健三	浦 信行
浦田 秀則	大磯ユタカ	大津留 晶	岡村 富夫	小川 久雄	小野 美明	柏原 直樹
柏木 厚典	加藤 丈司	川口 秀明	河野 雄平	河南 洋	菊池健次郎	木越 俊和
木曾 良明	北見 裕	北村 和雄	衣川 徹	木村 定雄	木村 時久	久代登志男
熊谷 裕生	倉林 正彦	栗原 裕基	上月 正博	河野 雅和	児島 将康	後藤 淳郎
小林 直彦	小室 一成	斎藤 能彦	笹野 公伸	佐藤 文俊	塩之入 洋	重富 秀一
七里 眞義	菅原 照	瀬戸 信二	相馬 正義	高木耕一郎	高須 信行	高野加寿恵
高橋 和広	高橋 貞夫	高柳 涼一	竹越 襄	武田 仁勇	千原 和夫	辻井 悟
蔦本 尚慶	寺田 典生	東條 克能	徳留 悟朗	戸恒 和人	中野 茂	中村 元行
中元 秀友	成宮 周	西川 哲男	錦見 俊雄	西村 和修	西村 眞人	萩原 啓実
橋爪 潔志	橋本 隆男	林 晃一	林 登志雄	檜垣 實男	東浦 勝浩	久留 一郎
平井 愛山	平田 恭信	廣江 道昭	廣岡 良隆	広瀬 茂久	福井 清	福田 昇
藤原 久義	榊田 出	松浦 秀夫	松澤 佑次	水野 兼志	光山 勝慶	宮内 卓
宮崎 滋	宮崎 瑞夫	向山 政志	宗 友厚	村上 治	村木 篁	森 泰清
森井 成人	森瀬 敏夫	保嶋 実	山路 徹	山下 博	山田 敬行	山本 繁樹
山本 格	家森 幸男	吉林 宗夫	吉政 孝明	樂木 宏実	渡辺 毅	

■評議員【136名】

赤澤 宏	浅原 哲子	小豆島健護	有馬 秀二	有馬勇一郎	安藤 孝	池田 惠一
池田 康将	石上 友章	石田 純治	泉 康雄	泉 裕一郎	泉家 康宏	市原 淳弘
一色 政志	海老原 健	大石 充	大谷健太郎	尾形真規子	小川 佳宏	小倉彩世子
尾上 健児	柿添 豊	笠原 正登	方波見卓行	勝田 秀紀	勝谷 友宏	神出 計
神吉 昭子	唐島 成宙	川上 利香	岸 拓弥	岸本 一郎	木下 秀之	日下部 徹
桑原宏一郎	栗原 孝成	此下 忠志	小松 弥郷	酒井 寿郎	坂本 昌也	篠村 裕之
佐田 政隆	佐藤 敦久	佐藤 貴弘	佐藤 稔	沢村 達也	柴田 洋孝	島袋 充生
清水 逸平	下澤 達雄	下平 雅規	新藤 隆行	菅波 孝祥	菅原 明	杉本 研
杉山 徹	須田 道雄	関 康史	曾根 正勝	園山 拓洋	染川 智	高橋 克敏
高橋 将文	鷹見 洋一	竹越 一博	武田 憲文	竹田 征治	田中 智洋	田中 愛
田辺 晶代	谷山 義明	種本 雅之	田村 功一	田村 尚久	土屋恭一郎	鶴田 敏博
土居健太郎	東口 治弘	徳留 健	富田奈留也	永江 徹也	中岡 隆志	中川 修
中川 眞代	中川 靖章	長瀬 美樹	長田 太助	中谷 公彦	永谷 憲歳	中山 智祥
中山 雅文	名越 智古	西山 成	野出 孝一	長谷川浩二	浜中 一郎	原田 昌樹
東邦 康智	人見 浩史	廣瀬 卓男	深水 昭吉	古橋 眞人	古本 智夫	堀尾 武史
本間康一郎	前島 洋平	楨野 久士	益崎 裕章	丸山 和晃	三浦伸一郎	水野 雄二
南野 徹	宮里 幹也	宮下 和季	宮本 恵宏	茂木 正樹	森 潔	森 建文
森下 竜一	森本 聡	八十田明宏	柳沢 正史	山下 潤	山原 研一	山本 啓二
山本 浩一	横井 秀基	吉賀 正亨	吉田 尚弘	吉田 英昭	吉田 陽子	吉村 道博
吉本 貴宣	米田 隆	脇野 修				

■2024年度新入会会員【31名】

石賀 浩平	伊藤 亘	内田 尚宏	奥山 虎章	小栗 靖生	甲斐 健佑	笠井 郁也
唐崎 航平	小泉 滋樹	小杉 大輔	小林 秀樹	近藤 萌	柴田 智博	新城 明仁
杉岡 清香	相馬 雄輔	高須 将伸	Zhang Jingxuan	西村絵里那	平井 萌絵	藤原 直樹
細野 博敬	本間健一郎	増川 太輝	丸橋 春介	丸山 功祐	三上 香織	満野竜ノ介
山田 敏寛	横田 健一	和田 恵梨				

第 28 回日本心血管内分泌代謝学会 評議員会・総会 議事録

日 時 : 2024 年 12 月 7 日 (土) 12:50~13:10
場 所 : 九州大学医学部百年講堂 第 1 会場 (中ホール)
評議員数 : 146 名
正会員数 : 483 名

【承認事項】

- 第 1 号議案 役員選任の件
- 第 2 号議案 名誉会員・功労評議員の件
- 第 3 号議案 評議員の件
- 第 4 号議案 第 30 回 (2026 年度) 学術総会会長の件
- 第 5 号議案 2023 年度会計報告の件

【報告事項】

- 1. 研究賞の件
- 2. 各委員会委員選任の件
- 3. 今後の学術総会予定
- 4. 会員数
- 5. 長期会費未納会員の件

評議員会・総会の開催にあたり吉村道博理事長から出席人数の確認があり、定款 21 条及び定款 26 条の定足数 (評議員会 98 名、総会 161 名) を満たす出席者 (評議員会 98 名、総会 209 名、委任状を含む) があることから、本評議員会・総会は成立する旨報告があった。次いで、定款第 20 条および第 24 条により、小川佳宏会長を議長に指名し、議事が進行された。

【承認事項】

- 第 1 号議案 役員選任の件

今年度総会で栗原裕基、児島将康、向山政志、樂木宏実の各理事が年齢規程により任期満了退任となることが報告、承認され、市原淳弘、小川佳宏、益崎裕章、南野 徹、柳沢正史の各理事の再任が承認された。第 29 回学術総会会長付幹事候補者として小豆島健護会員が承認された。

- 第 2 号議案 名誉会員・功労評議員の件

名誉会員候補者はなしと報告された。

次に、功労評議員候補者として荒井宏司 (京都工芸繊維大学保健管理センター)、伊東宏晃 (浜松医科大学 周産母子センター)、上田陽一 (産業医科大学)、衣川 徹 (医療法人 きぬがわ内科循環器内科)、寺田典生 (高知大学 医学部 内分泌代謝・腎臓内科学科講座)、東浦勝浩 (コスモクリニック)、廣岡良隆 (医療法人社団高邦会 高木病院 高血圧・心不全センター)、深水昭吉* (筑波大学 生存ダイナミクス研究センター)、宗 友厚 (川崎医科大学糖尿病・代謝・内分泌内科)、森 泰清 (大阪府済生会泉尾病院腎臓内科)、吉村道博* (東京慈恵会医科大学循環器内科) の各評議員が承認された。(* 役員のため、功労評議員就任は 1 年後の 2026 年 4 月 1 日)

第3号議案 評議員の件

(1) 新評議員について

新評議員として小豆島健護（横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学）、関 康史（東京女子医科大学高血圧・内分泌内科）、丸山和晃（三重大学大学院医学系研究科修復再生病理学）の各会員が承認された。

(2) 再任評議員について

4年の任期を満了する任期満了評議員として以下の46名を再任することが承認された。

浅原哲子、池田恵一、石上友章、石田純治、泉裕一郎、泉家康宏、一色政志、大石 充、尾上健児、柿添 豊、方波見卓行、勝田秀紀、木下秀之、此下忠志、佐田政隆、佐藤貴弘、沢村達也、柴田洋孝、杉本 研、杉山 徹、曾根正勝、染川 智、高橋将文、竹越一博、武田憲文、竹田征治、田中智洋、田中 愛、田村功一、東口治弘、徳留 健、富田奈留也、中川 修、中川眞代、長田太助、中谷公彦、長谷川浩二、廣瀬卓男、深水昭吉、前島洋平、南野 徹、宮里幹也、柳沢正史、山原研一、米田 隆、脇野 修の各評議員

第4号議案 第30回（2026年度）学術総会会長の件

第30回（2026年度）学術総会会長に益崎裕章理事（琉球大学大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座（第二内科））が承認された。

第5号議案 2023年度会計報告の件

(1) 2023年度一般会計

収入合計 29,511,331 円（前期繰越金 25,834,179 円、会費収入 1,679,000 円、受取利息 183 円、高峰賞寄附金 1,000,000 円、中尾賞・永井賞寄附金 300,000 円、寄附金 200,000 円、学術総会会計繰入金 497,969 円）、当期収入は 3,677,152 円と報告された。

また支出合計 3,144,431 円（印刷費 15,400 円、通信運搬費 84,401 円、人件費 1,084,000 円、YIA 表彰費（副賞）400,000 円、YIA 表彰費（記念品代）1,760 円、高峰賞関連費 992,200 円、中尾賞・永井賞関連費 100,000 円、負担金（振込手数料）25,290 円、家賃 250,000 円、事務費 141,900 円、雑費 49,480 円）、当期収支差額 532,721 円、次期繰越収支差額 26,366,900 円と報告された。

(2) 2023年度学術総会会計

収入合計 756,503 円（参加費 153,700 円、広告費 74,800 円、共催セミナー528,000 円、利息 3 円）、支出は同額で準備費 29,720 円、運営費 218,616 円、雑費 10,198 円、納税充当引当金 497,969 円は学術総会会計繰入金口座に入金したと報告された。

岸監事から徳留監事とともにに行った監査の結果、一般会計の会計報告及び学術集会の会計処理は適切に行われている旨報告され、承認された。

<報告事項>

1. 研究賞の件

(1) 第28回高峰讓吉賞・高峰讓吉研究奨励賞・第5回中尾一和賞 受賞者

第 28 回高峰譲吉賞に田村功一主任教授（横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学）を、第 28 回高峰譲吉研究奨励賞に中山幸輝助教（東京大学医学部附属病院循環器内科）、三島英換 Senior Scientist（Helmholtz Zentrum München, Institute of Metabolism and Cell Death）、第 5 回中尾一和賞に野村征太郎特任准教授（東京大学医学部附属病院循環器内科先端循環器医科学講座）を 5 月 14 日 Web 会議で選定した旨、報告された。

(2) 若手研究助成 YIG 受給者

今年度から開始した若手研究助成 YIG に 13 件の応募があり、稲住英明日本学術振興会特別研究員-PD（東京大学医学部附属病院循環器内科）と和田恵梨特任助教（名古屋大学環境医学研究所分子代謝医学分野）の 2 名が受給者と決定したことが報告された。12 月 7 日の学術総会の閉会式にて研究計画を発表いただく予定である。

2. 各委員会委員選任の件

(1) 2025 年度高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾一和賞・永井良三賞選考委員の選任について

選考委員長	吉村道博	東京慈恵会医科大学 循環器内科
年次会長	田村功一	横浜市立大学 医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学
継続委員：任期 2 年 2023 年度総会～2025 年度総会まで		
	菅波孝祥	名古屋大学 環境医学研究所 分子代謝医学分野
	長瀬美樹	杏林大学 医学部 肉眼解剖学
	南野 徹	順天堂大学 大学院医学研究科 循環器内科

新委員：任期 2 年 2024 年度総会～2026 年度総会まで

	小川佳宏	九州大学大学院医学研究院 病態制御内科学
	桑原宏一郎	信州大学 医学部 循環器内科学教室
	下澤達雄	国際医療福祉大学 成田病院 臨床検査科

(2) 2025 年度 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾一和賞・永井良三賞推薦委員の選任について

委員長	深水昭吉	筑波大学 生存ダイナミクス研究センター
委員：	市原淳弘	東京女子医科大学内分泌疾患総合医療センター高血圧内分泌内科
	新藤隆行	信州大学 医学部医学科 循環病態学教室
	益崎裕章	琉球大学 大学院医学研究科内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座 (第二内科)
	柳沢正史	筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IIIS)

(3) 2025 年度若手研究奨励賞 (YIA) 選考委員の選任について

選考委員長 (2025 年度学術総会会長)

	田村功一 会長	横浜市立大学 医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学
--	---------	--------------------------

継続委員：

	遠山周吾	慶應義塾大学 医学部 循環器内科
	野村征太郎	東京大学 医学部附属病院 循環器内科
	山城義人	国立循環器病研究センター 先端医療技術開発部

新委員：

椎村祐樹 久留米大学 分子生命科学研究所遺伝情報研究部門
田中 愛 信州大学 医学部医学科 循環病態学教室
村田知弥 岐阜大学高等研究院 One Medicine
トランスレーショナルリサーチセンター

(4) 庶務・学術・財務委員会 委員

庶務委員会

委員長：下澤達雄

委員：有馬勇一郎、岸 拓弥、桑原宏一郎、西山 成

若手委員：栗原孝成、小山晃英、中野大介、吉江幸司

学術委員会

委員長：小川 佳宏

委員：菅波孝祥、徳留 健、林 香

若手委員：河原崎和歌子、木内謙一郎、清水逸平

財務委員会

委員長：田村功一

委員：曾根正勝

若手委員：名越智古

3. 今後の学術総会予定

第 29 回（2025 年度）学術総会

田村功一 会長 横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学

2025 年 9 月 27 日（土）～9 月 28 日（日）パシフィコ横浜ノース

（石上友章 副会長 横浜市立大学附属病院 循環器内科）

4. 会員数

2024 年 10 月 8 日現在

一般会員 334 名（年会費 3,000 円）

評議員 123 名（年会費 5,000 円）※理事・監事・幹事除く

理事 18 名（年会費 10,000 円）

監事 2 名（年会費 5,000 円）

幹事 3 名（年会費 5,000 円）

功劳評議員 112 名

名誉会員 36 名

会員合計 628 名（2023 年 9 月 1 日時点では 631 名）

休会中の会員 49 名

5. 長期会費未納会員の件

連続 3 年間の会費未納者（一般会員 14 名、評議員 1 名）については、前年度末（2024 年 3 月末）に自動的に退会することが報告された。今後も 3 年以上連続して会費未納者で会費納入にご賛同いただけない場合は、自動的に退会処理することが確認された。